

博 多 25

— 第38次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第280集

1 9 9 2

福岡市教育委員会

博多 25

—第38次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第280集



1992

福岡市教育委員会

序

JR 博多駅から博多湾にかけての市街地の地下には古代以来、大陸との貿易拠点として栄えた中世都市「博多」が包蔵されています。

近年、都市基盤整備が進み高層ビル化が進んでいます。これらの再開発事業に伴い、100ヶ所に近い発掘調査を実施しています。

本書は、都市基盤整備が進みました大博通りに面した第38次調査の発掘調査報告書です。調査においては、古代から現代にかけての多種多様の遺物資料を得るとともに、中世都市「博多」の町割り解明に役立つ溝などを検出することができました。

発掘調査から資料整理までの4年間にわたって費用負担をはじめ、多くのご協力を賜わった東京生命保険相互会社関係各位に対し、心から感謝の意を表します。最後に、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は、博多区店屋町1番30号の東京生命保険相互会社によるビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1988年4月から8月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第38次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は山口譲治、上方高弘、城戸康利、内海武則、阿比留伸爾、村田裕一、井手かすみ、丸山陽子、尾崎君枝、鶴田慶子、森野洋子、山口朱美、山崎美枝子があたった。
3. 本書使用の遺物実測図は、亀井明徳、星子輝美があたった。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口譲治、上方高弘が、遺物を平川敬治があたった。
5. 本書使用の図面の整図は、山口譲治、亀井明徳、摺巣久美子、山口朱美があたった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆は、出土遺物については亀井明徳が、その他は山口譲治があたり、編集は山口があたった。
8. 本調査地出土遺物および本調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

I 序説	
1.はじめに	3
2.調査体制	3
3.遺跡の位置と立地	5
4.本調査地周辺の調査	5
II 調査の記録	
1.調査の概要	7
2.第1面の調査	8
1) 第1面検出遺構	9
2) 第1面検出遺構出土遺物	12
3) 表土層出土遺物	15
3.第2面の調査	17
1) 第2面検出遺構	18
2) 第2面検出遺構出土遺物	27
3) 第2面検出時出土遺物	46
4.第3面の調査	49
1) 第3面検出遺構	50
2) 第3面検出遺構出土遺物	61
3) 溝状遺構と出土遺物	77
4) 第3面検出時出土遺物	84
III おわりに	84

挿 図 目 次

Fig. 1	博多第38次調査地点地形実測図	4
Fig. 2	第38次調査地点近景（西から）	6
Fig. 3	博多遺跡群調査地点位置図	（折り込み）
Fig. 4	第1面遺構分布図	8
Fig. 5	第1面遺構検出状況（東から）	9
Fig. 6	第1面検出遺構実測図	10
Fig. 7	第1面遺構検出状況	11
Fig. 8	第85号土壤（SX-85）実測図	12
Fig. 9	第1面検出遺構出土遺物	13
Fig. 10	第1・2面検出遺構出土遺物	14
Fig. 11	表土層出土遺物	15
Fig. 12	第2面遺構分布図	16
Fig. 13	第2面遺構分布状況（北から）	17
Fig. 14	第164・208号井戸（SE-164・208）実測図	18
Fig. 15	第208号井戸検出・完掘状況	19
Fig. 16	第251号井戸完掘状況	20
Fig. 17	第97・104・107号土壤（SK-97・104・107）実測図	21
Fig. 18	第201・238・247・264号土壤（SK-201・238・247・264） および第175号柱穴（SP 175）実測図	22
Fig. 19	第2面土壤検出・完掘状況	23
Fig. 20	第247・261号土壤完掘状況	24
Fig. 21	第175号柱穴遺物出土状態	25
Fig. 22	第162号掘立柱建物（SB-162）実測図	25
Fig. 23	第162号掘立柱建物検出状況	26
Fig. 24	第1・2面検出遺構出土遺物実測図	26
Fig. 25	第90・104・106号土壤出土遺物	28
Fig. 26	第105・107～110号土壤出土遺物	29
Fig. 27	第163・170・201・207・231号土壤および第208号井戸出土遺物	31
Fig. 28	第235・237～239・244・245・247号土壤出土遺物	32
Fig. 29	第246・261・265・268・285・286号土壤出土遺物	34
Fig. 30	第511～513・529号土壤出土遺物	35
Fig. 31	第514・528号土壤出土遺物	36

Fig.32	第515号土壤出土遺物	37
Fig.33	第516号土壤出土遺物	38
Fig.34	第512・528号土壤出土遺物実測図	40
Fig.35	第529号土壤出土遺物実測図	40
Fig.36	第232号土壤出土遺物（1）	41
Fig.37	第232号土壤出土遺物実測図	42
Fig.38	第232号土壤出土遺物（2）	44
Fig.39	第232号土壤出土遺物（3）	45
Fig.40	第2・3面検出時出土遺物実測図	46
Fig.41	第2面検出時出土遺物（1）	47
Fig.42	第2面検出時出土遺物（2）	48
Fig.43	第3面遺構分布図	49
Fig.44	第3面東側遺構分布状況	49
Fig.45	第3面遺構分布状況	50
Fig.46	第385・434号井戸(SE-385・434)実測図	51
Fig.47	第459・470・473号井戸(SE-459・470・473)実測図	52
Fig.48	第312・385号井戸完掘状況	53
Fig.49	第453・459号井戸完掘状況	54
Fig.50	第281号土壤完掘状況	55
Fig.51	第287・299・311・331号土壤(SK-287・299・311・331)実測図	56
Fig.52	第299号土壤出土遺物出土状態	57
Fig.53	第332・363・372・409号土壤(SK-332・363・372・409) および第391号柱穴(SP-391)実測図	58
Fig.54	第208・312・453号井戸出土遺物	59
Fig.55	第283・287号土壤出土遺物	60
Fig.56	第283・286号土壤出土遺物実測図	61
Fig.57	第297・299号土壤出土遺物	62
Fig.58	第299・339号土壤出土遺物実測図	63
Fig.59	出土遺物実測図	63
Fig.60	第311・319・331・333・334・339・345・347号土壤出土遺物	64
Fig.61	第337・344号土壤出土遺物	66
Fig.62	第344号土壤出土遺物実測図	68
Fig.63	第363・405・422号土壤出土遺物実測図	69
Fig.64	第361～364・368・370・384・401号土壤出土遺物	70
Fig.65	第374号土壤出土遺物	72

Fig.66	第405・409・422・517号土壤出土遺物	73
Fig.67	第468号土壤出土遺物	74
Fig.68	各柱穴出土遺物実測図	75
Fig.69	柱穴、第85号埋葬土壤出土遺物	76
Fig.70	第240号溝出土遺物（1）	78
Fig.71	第240号溝出土遺物（2）	79
Fig.72	第240号溝出土遺物（3）	80
Fig.73	第266・336号溝（SD—266・336）土層断面図	81
Fig.74	出土遺物実測図	81
Fig.75	第266・367・403号溝出土遺物実測図	82
Fig.76	第367号溝（SD—367）土層断面図	82
Fig.77	第3面検出時出土遺物	83

表 目 次

Tab. 1	第239号土壤出土土師器計測表	33
Tab. 2	第511号土壤出土土師器計測表	39
Tab. 3	第513号土壤出土土師器計測表	39
Tab. 4	第232号土壤出土土師器計測表	43
Tab. 5	第311号土壤出土土師器計測表	65
Tab. 6	第337号土壤出土土師器計測表	65
Tab. 7	第347号土壤出土土師器計測表	69
Tab. 8	第364号土壤出土土師器計測表	71
Tab. 9	第374号土壤出土土師器計測表	71
Tab.10	第405号土壤出土土師器計測表	74
Tab.11	第240号溝出土土師器計測表	77
Tab.12	第3面検出時出土土師器計測表	84

I 序 説

1. はじめに

博多区店屋町の大博通りに面した一画に、東京生命保険相互会社によるビルの増改築が計画された。この地は、博多遺跡群の中央部からやや北寄りに位置している。ビルの増改築の計画者である東京生命保険相互会社の依頼により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、擾乱は進んでいるものの、標高3.3mで砂層を基盤とする遺構面を検出した。また、多量の中世から近世にかけての輸入・国产陶磁器類が出土した。試掘調査結果および周辺地の発掘調査の成果から、埋文課は、地下室所在部分を除き計画地全域に遺構が遺存しているとし、計画変更し保存するか、全面的な発掘調査が必要であると決定した。以上の決定を受け、埋文課と東京生命保険相互会社は協議を重ねたが、現状保存は困難であり、止むをえず記録保存のための調査を実施することとなった。

以上の調査決定を受け、調査費・調査期間・出土遺物の扱いなどについての協議に入り、それぞれ契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、矢板打ち込み、調査事務所用プレハブの設置、表土層のすき取り後、中世をはじめとする各時期の様相把握を目的とし、約3ヶ月間にわたって実施した。

遺跡調査番号	8805	遺跡略号	HKT-38	分布地図番号	049-A-1
調査地地籍	博多区店屋町1番30号			調査実施面積	420m ²
調査期間			1988年4月25日～同年8月2日		

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことができなかつたが、東京生命保険相互会社をはじめとする関係各位の協力のもとに、発掘調査は順調に進行しました。しかし、整理報告作業は、調査担当である山口の調査業務繁多により3年間にわたりました。関係各位にこの場をお借りし、お詫び申し上げるとともに、ご協力に謝意を表します。また、遠隔地であるにもかかわらず、現場作業にたずさわってくださいました作業員の皆様に感謝いたします。

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係
教育長 佐藤善郎(前) 井口雄哉 前 文化部長 川崎賢治
文化財部長 花田亮一 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前) 折尾 学

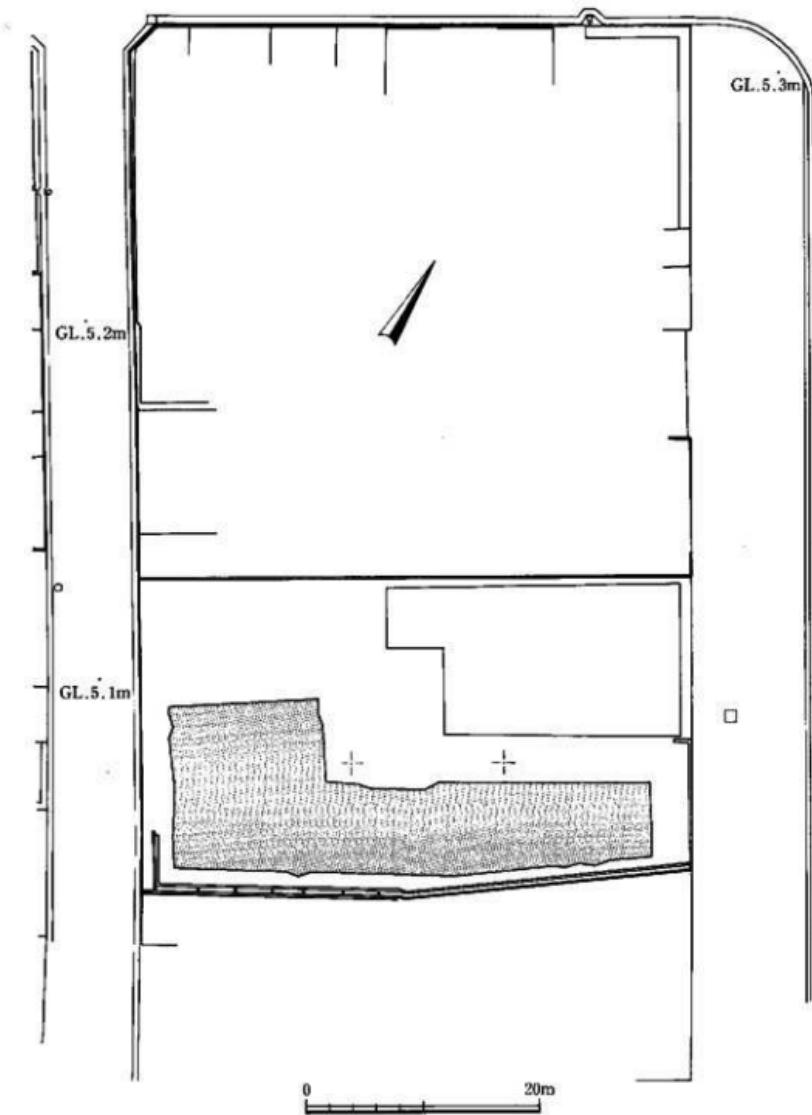


Fig. 1 博多第38次調査地点地形実測図

	第二係長	飛高憲雄（前）	塩屋勝利
調査担当	山口謙治	吉留秀敏	
遺物整理担当	亀井明徳	（専修大学文学部）	
試掘調査担当	山崎純男	（現文化財整備課主査）	下村智 大庭康時
事務担当	松延好文	（前） 中山昭則 吉田麻由美	
調査補助員	城戸康利	（現太宰府市教育委員会） 上方高弘	
整理補助員	平川敬治	撫養久美子	
調査・整理協力者	犬丸陽子	山口朱美	
調査協力者	内海武則	村田裕一 阿比留仲爾（山口大学）	井手かすみ 尾崎君枝
	鶴田慶子	藤野洋子 山崎美枝子	
整理協力者	星子輝美 平野徳子 神谷玲子 堀苑京美 土堀崎つや子 小森佐和子 榎崎多佳子		

3. 遺跡の位置と立地

福岡平野の博多湾岸には砂丘が形成されている。博多湾岸の砂丘上には、大遺跡群が東から西まで所在している。博多遺跡群は、博多湾岸中央部の御笠川・那珂川に挟まれた砂丘上に位置している。この地の砂丘は、大きく海側の「息の浜」と、内陸側の「博多浜（御田浜）」からなり、博多遺跡群は両砂丘とその間に所在している。現在、行政的町割りの博多駅前一丁目・二丁目、祇園町、御供所町、冷泉町、店屋町、下川端町、網場町、上呉服町、中呉服町、下呉服町、奈良屋町、古門戸町、須崎町にあたる。現在、この地は商業地域として市街化し、博多駅前から海まで標高4~6mの平坦な地形となっている。

本調査地点は、JR博多駅から海に向かって一直線に延びている大博通りに面し、大博通りと国道202号線が交差する呉服町交差点の南200mにあたり、標高5.1m前後に位置している。博多遺跡群のなかでみていくとほぼ中央部にあたり、「息の浜」と「博多浜」の間に位置している。国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から16.1cm、東から16.3cmの位置にあたる。

4. 本調査地周辺の調査

博多遺跡群の調査は、1977年の都市高速道（地下鉄建設に伴う調査）を端緒として、1992年までに民間による開発に伴うもの72ヶ所、公共事業に伴うもの18ヶ所が実施されている。現段階の調査実施面積は約4.2haで、80ha前後の規模をもつ博多遺跡群の5%前後の調査が実施されているにすぎないといえよう。

これまで博多遺跡群南側の「博多浜」砂丘上の調査が比較的多く実施され、弥生時代から中世にかけての各時期の様相がわかりつつある。しかし、博多遺跡群の中央部から北側にかけて

はまだ点的に調査が実施されているにすぎない。

本調査地周辺では、第39・40・43・61次調査と大博通りを挟み、第35次調査・築港線関係の調査などが実施されている。近接する第43次調査では9～10世紀の製鉄炉址が検出され、第39次調査では8世紀後半以降の土壙・溝・柱穴などが検出されている。また、同調査では、銅製帶金具・須恵器の円面鏡・墨書き須恵器・老司式瓦・綠釉・灰釉陶器・越州窯系青磁なども出土している。本調査地周辺では、築港線関係調査を重ね合わせてみると8世紀後半には人の居住があり、律令官人の存在が推定できる。

中世都市博多を考えるうえでは、第40・61次調査成果は多大なものがある。1点は、第40次調査で12世紀末頃から遺構が検出できるが、第61次調査では13世紀から遺構が確認できる。このことは博多の街の拡大化を考えるうえで参考となろう。もう1点は、第40次調査での14世紀から16世紀にいたる道路の検出である。この道路は第35次調査検出のものに直交していることから、中世の町割りを想定しているといえよう。



Fig. 2 第38次調査地点近景（西から）

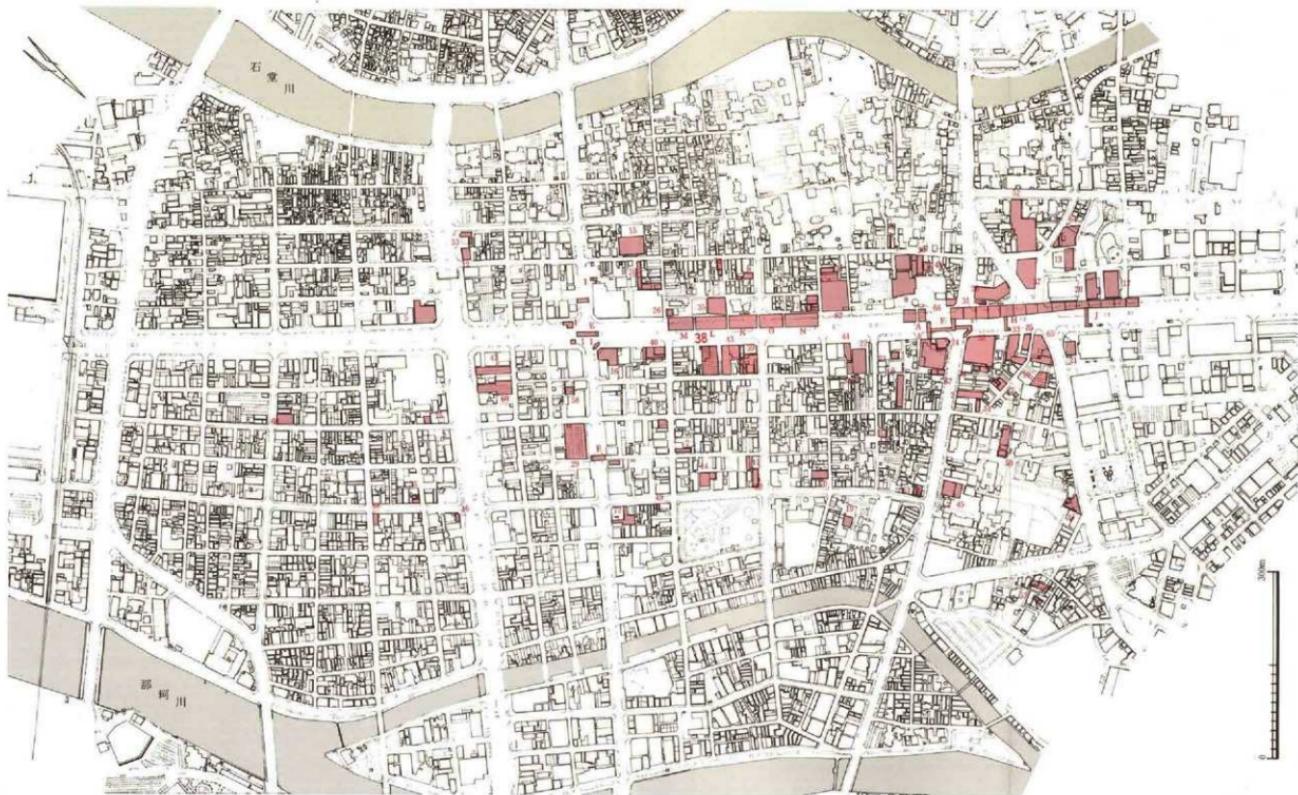


Fig. 3 博多遺跡群調査地点位置図

II 調査の記録

1. 調査の概要

ビルの増改築予定地は大博通りとその西の道路に挟まれ、25×47m の東西方向に長い長方形を呈している。試掘調査後の埋文課との協議の過程で、調査対象地は決定され、矢板打ち込みおよび土止め工事を行なっていただいた。調査区はL字状をなし、調査事務所の横に調査地への昇降用の階段を設置しているため、階段の下と階段から東への通路として70cmの引きを取り調査を実施した。

調査はアスファルト舗装および整地層のすき取り後、20cm前後瓦礫が残っていたので、これを重機を使用し除去することから始めた。瓦礫等を除去すると、黒褐色から暗褐色を呈する砂混じりの粘土層中に遺構が検出できたので、これを第1面として遺構確認を行なった(標高4.2m前後)。次に約70~90cm重機を使用し掘削した結果、調査区の西側は基盤層である白黄色砂層となったため、この面を第2面とした(標高3.3~3.5m)。調査区の西側は基盤層であるが、中央部から東側にかけては暗褐色から黒褐色の粘質土・シルトが堆積し、縦横に遺構が切り合つており、近世の遺構がなくなるまでを第2面として調査を行なった。近世の遺構を除去してしまうと、基盤層である白黄色砂層が峻陥状に残り、黒褐色から暗灰色の粘質土・シルト混じりの砂質土を覆土とする遺構が検出できた。これを第3面とした(標高3.1~3.5m)。

第1~3面では、現代から古代までの井戸・土壙・土壤墓・溝・柱穴など多数の遺構を検出した。検出遺構は、井戸をSE、土壙をSK、掘立柱建物をSB、柱穴をSP、その他をSXと遺構記号を使用し、検出順に通し番号を付した。なお、本書では遺構記号と遺構名を併記して使用していく。

出土遺物については、遺跡登録番号を頭に付し、金属器は00001から、土器・石製品の遺物は01001から通し番号を付して登録番号としている〔例：880500001~880500500(金属器)、880501001~(土器・石製品)〕。なお、本書では遺構および検出面ごとの通し番号とした。

本書は時間的制約のなかで製作しており、第1~3面の調査のなかで各面の概要を記し、検出面ごとに遺構・遺構出土遺物・各面検出時出土遺物に分けて記述していくこととする。

2. 第1面の調査

アスファルト舗装および瓦砾混じりの整地層など地表から80cm前後除去した面である(標高4.2m±5cm)。この面では調査区の南西部に幅2.5m、長さ12mの建物基礎の攪乱層があるが、黒褐色から暗褐色粘質土を基盤として遺構が検出できた。

検出遺構として、瓦質の深鉢を用いた埋め臺5基、井戸2基、土壤、柱穴など86基の遺構を検出した。

検出遺構からは中世の輸入・国産陶磁器も少量出土したが、出土遺物の70%以上は近世から現代にかけての陶磁器類で、そのほか人形・人形型などが多数出土した。遺物のなかにはイルカの頭骨や魚骨も含まれている。埋め臺の中には鮑などの貝殻が詰まっているもの、炉壁状のものが詰まっているものなどがあり、隅丸長方形を呈する土壤のなかには床面および壁が叩きしめられ、人形および人形型が多量に出土したものが多い。また、人形や人形型も、人形がもっとも多いが、筆筒・屋根型・箱庭など各種各様である。第1面検出遺構の大半は人形製作工房址といえよう(太宰府市教育委員山村信榮氏教示)。

第1面検出遺構は出土遺物から近世末頃のものも含むが、大半は大正時代末から昭和時代初期のものといえよう。

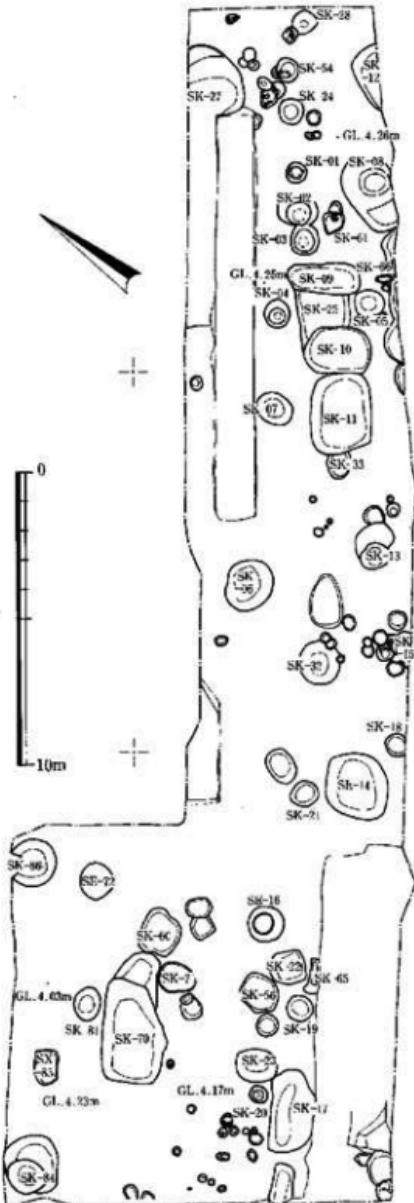


Fig. 4 第1面遺構分布図



Fig. 5 第1面遺構検出状況（東から）

1) 第1面検出遺構 (Fig. 6・7)

第1面では、調査区の西側でSE-16・72の2基の井戸を検出した。2基の井戸間は6mである。SE-16は径1.2m前後の筒状をなす掘り方をもち、幅18cm、長さ25cm、厚さ0.3cmの瓦12枚組1段で径76cmの井筒としている。SE-72も井筒に瓦が遺存しており、SE-16と同規模の井戸と考えられる。昭和時代初期に廃棄されたか。

埋め甕は、調査区の東側でSK-01～04の4基、西側でSK-20の1基を検出した。いずれも瓦質の深鉢を用いている。SK-04・20が底径25cm、他は底径35cm前後のものを用いている。SK-01～04では貝殻・骨製品・石製品や人形・炉壁などが入っており、墓ではなく人形工房と考えられる。

検出土壙は比較的大形で、平面形が隅丸長方形を呈するもの(SK-09など8基)、隅丸方形から円形を呈するもの(SK-06など18基)とイルカ頭骨埋葬の土壙(SX-85)などがある。SK-09～11などは長軸2.5～3.5m、短軸1～2m前後と規模が大きく、概して床面は平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がり、床面・壁面は粘土を貼り叩きしめられている。調査区の東側と西側に集中し、人形関係の遺物が多量に出土した。埋め甕とセットをなし人形工房と考えられる。SX-85は平面形隅丸方形を呈し、長軸1.25m、短軸0.87mを測り30cm前後の遺存である。

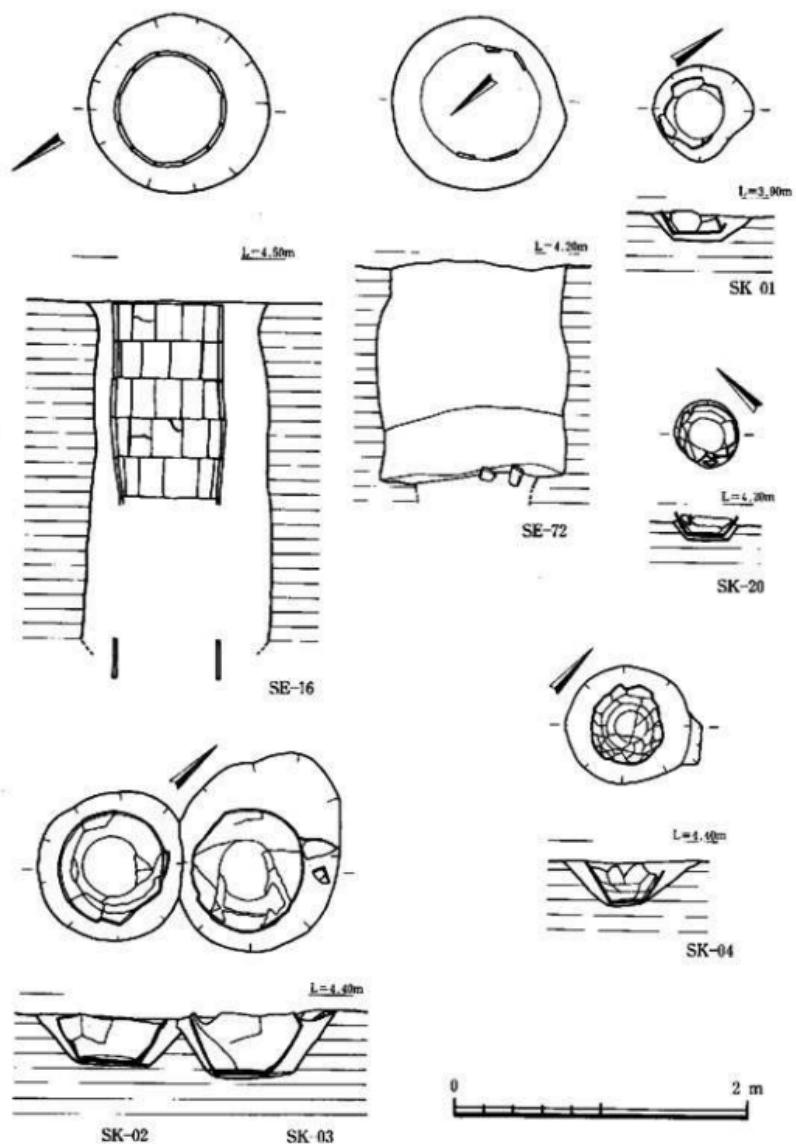
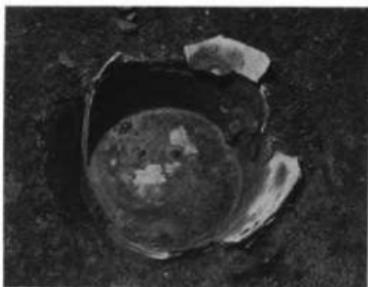
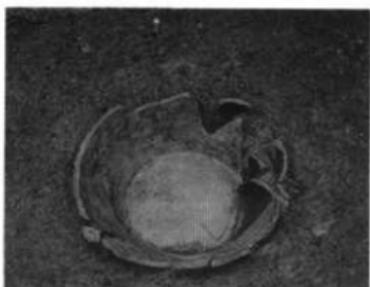


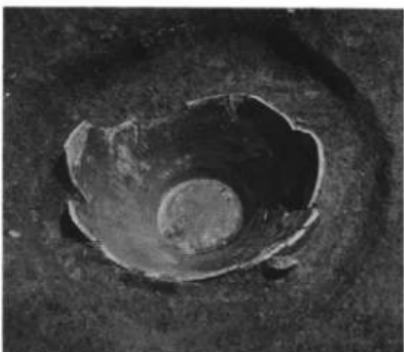
Fig. 5 第1面検出遺構実測図



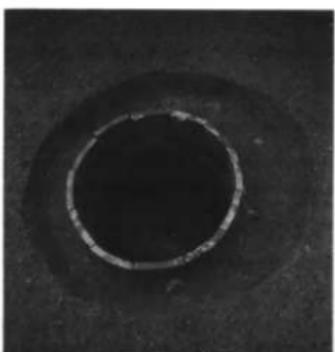
1) 第1号埋甌



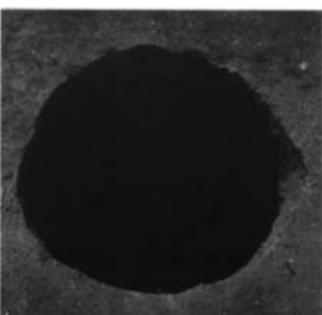
2) 第20号埋甌



3) 第4号埋甌



4) 第16号井戸



5) 第72号井戸



6) 第85号海豚埋葬土壤

Fig. 7 第1面遺構検出状況

角藻を用いてイルカ頭骨が安定するように置かれており、埋葬土壙と考えられる。出土遺物から近世末頃か。

2) 第1面検出遺構出土遺物 (Fig. 9~11)

SK-01 (Fig. 9) : 骨製の匙状製品で、残存長さ21.2cm、幅1.0~1.2cmである。銅鏡10枚を検出したが銹化が著しく銭貨名は不明である。

SK-02 (Fig. 9) : 1は象牙製のボタン、径2.1cm、2は「寛永通宝」である。

SK-06 (Fig. 9) : 1は棒状の石製品、2・3は銅鏡、4は径2.0cmの粘土品で、いわゆる「博多めんこ」の玩具、5は栓状品。

SK-07 (Fig. 9) : 竜泉窯青磁の鍋蓮弁文碗。

SK-08 (Fig. 9) : 1は瓦質の風炉と考えられるもので、口径21.5cm、中位の接合部で欠損している。2・3は銅製釘と釣り金具、4は雁首の折れ損品。

SK-09 (Fig. 9) : 写真は金銅製の釘隠し。この他に、径5.0cm、高さ3.2cmの船ガラスの盃形品があり、表面は黄白色の粉が付着している。

SK-10 (Fig. 9) : 1~3はよく似た土製の小形の人形であり、2の脚部に腹内に「宗口」の刻印がある。高さ17cm程度である。

SK-11・12 (Fig. 9) : SK-11は「永楽通宝」と煙管の銅製雁首と吸い口。

SK-17 (Fig. 9・22) : 1~3は溶解した銅を入れた丸底の容器で、ほぼ同形同大で径5~6cm、高さ3cmほどである。5は青色磁碗で、内面にヘラと櫛による施文があり、やや灰色気味の透明釉がかかる。外底は露胎で、焼き台跡が付いている。6は「寛永通宝」、7は銅片。8~10は銅製煙管。

SK-22・28 (Fig. 9) : SK-22から雁首、28から「寛永通宝」が各出土。

SK-54・56 (Fig. 10) : SK-54の白磁の小皿は外面に墨書があるが判読できない。SK-56は基石状の円形小石。

SK-70 (Fig. 10) : 1は幅の狭い銅板、2・3は銅製雁首。4は竜泉窯青磁の皿で、外面のヘラによる蓮弁文は弁間の離れるタイプであり、釉は若草色を呈する。口径は12.7cm、内面に擦痕がついている。

SP-34・44 (Fig. 69) : おのの「寛永通宝」2枚と銅製煙管の雁首と吸い口である。

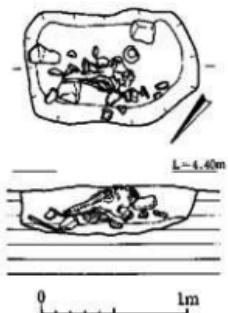


Fig. 8 第85号土壤 (SX-85)
実測図

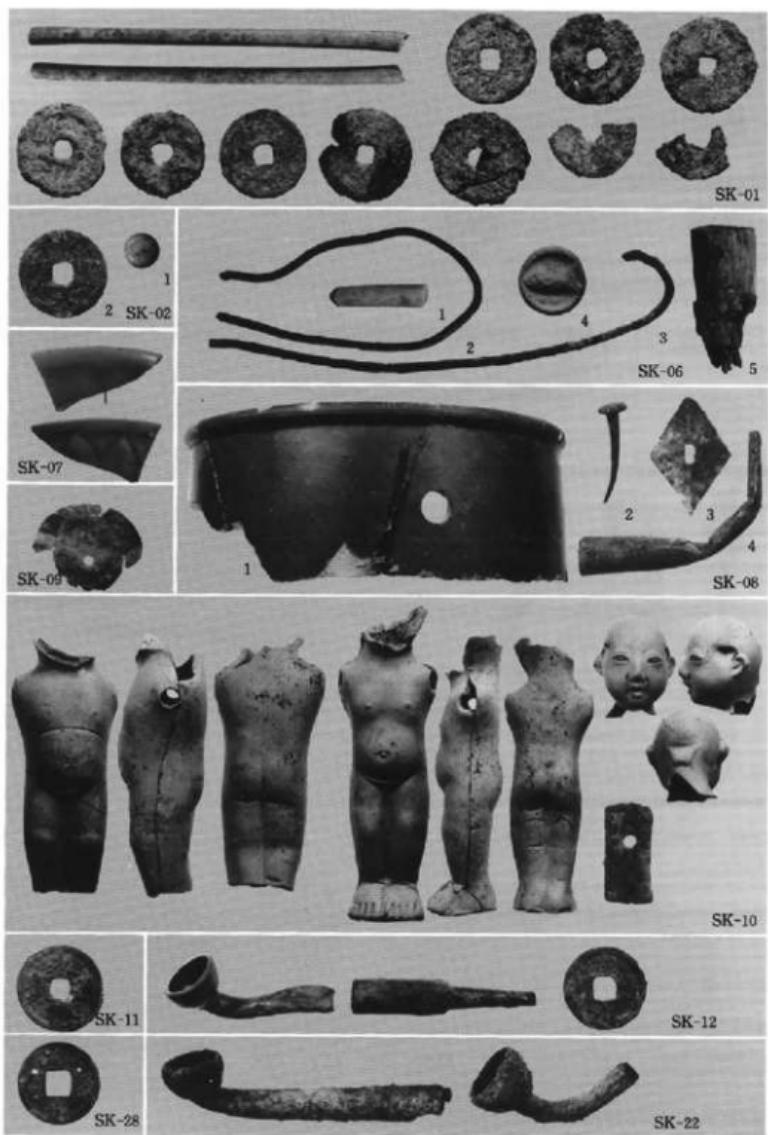


Fig. 9 第1面検出遺構出土遺物



Fig.10 第1・2面検出遺構出土遺物

3) 表土層出土遺物 (Fig.11)

1は白磁皿で11世紀前半のもので、露胎の底部に墨書が認められるが不鮮明であるが、筆順からみて「盧」であろう。2は、朝鮮王朝期の雜釉碗で、黄白色の釉が高台外側までかかり、露胎の兜巾削りの部分に花押墨書がある。3・4は唐津窯の皿。5は銅製釣針、鐵化は「元祐通宝」1枚と「寛永通宝」8枚その他は不明。

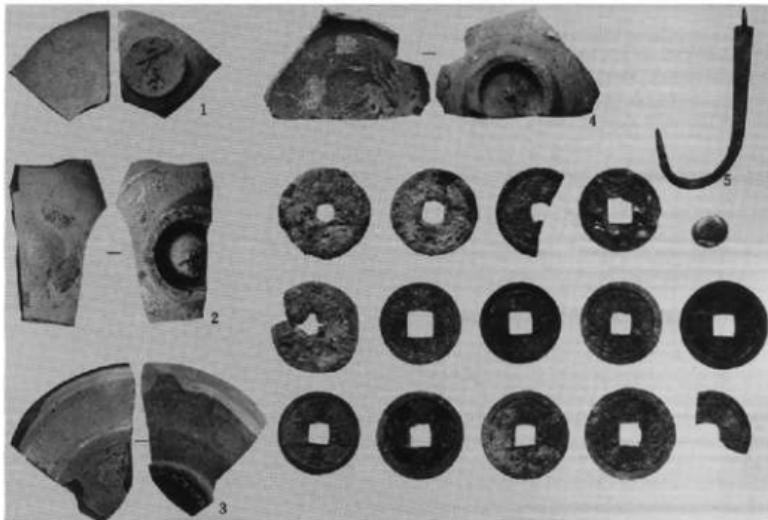


Fig.11 表土層出土遺物

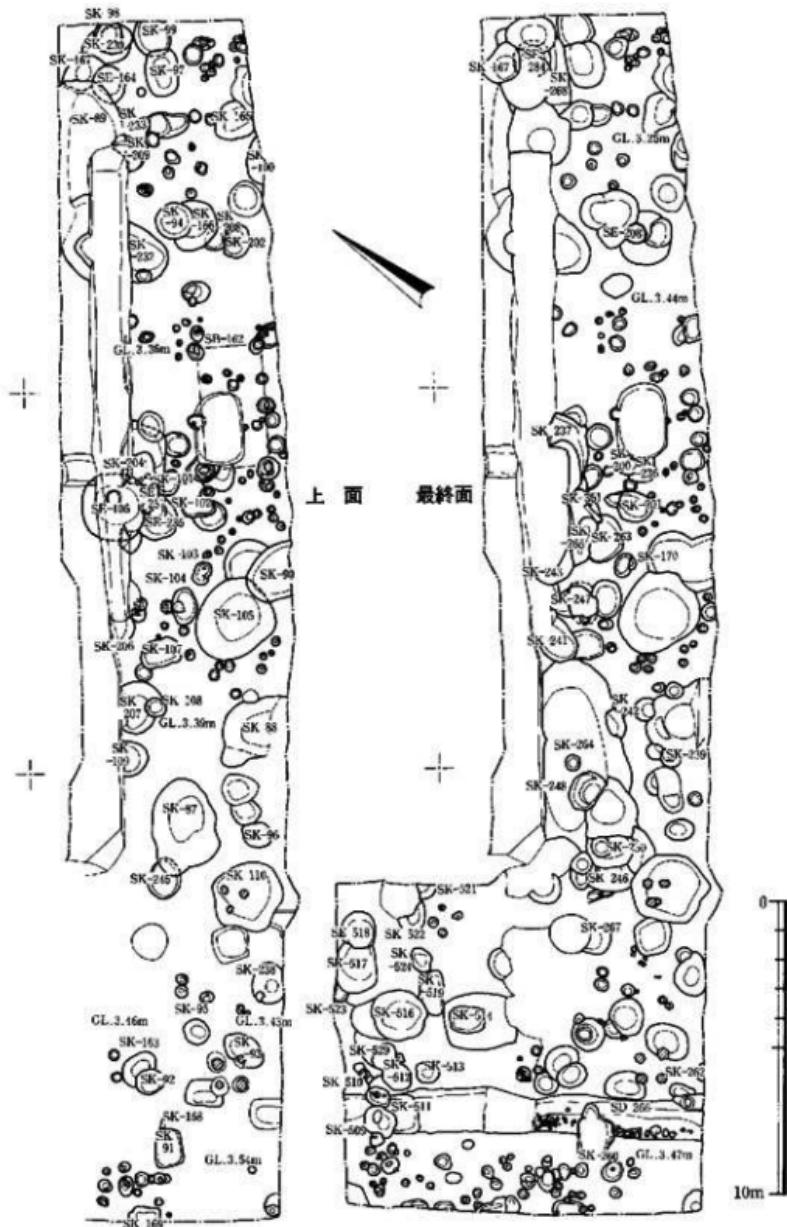


Fig.12 第2面遺構分布図

3. 第2面の調査

第1面から70~90cm掘削した面で、調査区の西側では基盤層である黄白色砂層中に、暗褐色のシルト混じりの砂を覆土した遺構が検出でき、中央部から東側にかけては暗褐色から黒褐色のシルトから粘質土を基盤として、砂混じりのシルト・粘質土を覆土とした遺構が検出できた（標高3.3~3.5m）。

第2面は遺構が縦横に切り合っているため、まず、西側は基盤層中に検出できる遺構のもっと新しいものを、中央部から東側にかけては遺構の切り合い関係が激しいため、平面形が円形・楕円形・隅丸方形を呈するものから調査を行なった。その結果、SE-106・164の井戸、SK-97などの土壌約50基とSB-162の掘立柱建物、柱穴を検出した。この面を第2-1面とした。この面検出の遺構は、18世紀前後の陶磁器が比較的まとまって出土するものが多いが、人形および人形型とともに近世末頃の遺物を含んでいるものがある。この面は掘立柱建物の遺存状態から、18世紀の面と考えられ、遺構のなかには19世紀の遺構を含んでいる。

第2面は、第2-1面後、暗褐色から黒褐色の粘質土・シルトがすべて遺構の覆土と考えられることから新しい遺構から順次調査を行ない、第2-2、2-3面として調査し図面を作製したが、第2面最終面として処理した。第2面最終面での検出遺構は、井戸、土壌、溝、柱穴がある。この面での遺構は16世紀後半から17世紀のものが主体をなし、16世紀前半に廻るもの



Fig.13 第2面遺構分布状況（北から）

と、18世紀のものがある。

第2面は遺構の切り合いが激しいため、調査区西側の張り出し部を廃土置き場とし、廃土置き場は、第3面遺構検出時に第2面に相当する近世の遺構の調査を行なった。したがって、第2面の遺構はSK-86～282・286と500番台の遺構である。

1) 第2面検出遺構

第2面は、同一面で5基以上の遺構の切り合いがある。ここでは切り合い関係にある遺構集中プロックごとに、各遺構を調査区の東側からみていくことにする。

調査区の東端部北側は、SK-89・97～99・167・209・230・233・268、SE-164の10基（SK-98・230は同一遺構）の遺構が切り合っている。このプロックでは、SK-89・97・98がもっとも新しく、SK-268がもっとも古く、SK-233はSK-268を切っているが、他の遺構には切ら

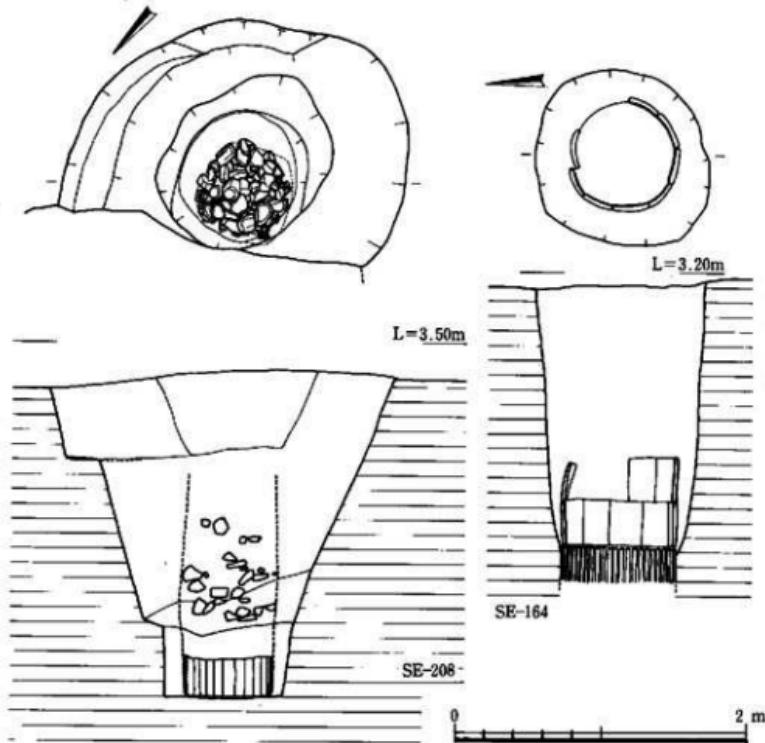


Fig.14 第164・208号井戸 (SE-164・208) 実測図



1) 検出状況



2) 完掘状況

Fig.15 第208号井戸検出・完掘状況

れている。SK-97は平面形隅丸長方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.1mを測り、30cm前後の深さをもち、床面はほぼ平坦であるが壁は鉢状に開きながら立ち上がっている。SE-164は径1.8m前後の円形で鉢形をなす掘り方をもち、井筒の最下部は木枠が使用されており、その上に瓦を組み上げている。SK-209に切られているSK-268は、中世の遺構と考えられる。SK-89は近世未頃か。

SK-89など切り合いブロックの西5mに、SK-94・166・202・SE-208の4基の遺構の切り合いの集中区がある。SK-94がもっとも新しく、SE-208が古い。SE-208は径2.3mを測る平面形円形で鉢形をなす掘り方をもち、幅8cm、長さ30cm弱の板材を巡らして井筒としている。なお、井筒には廻棄行為と考えられるが、人頭大の礫が詰め込まれている。井戸底の標高は1.1m。本井戸は中世の後半期のものか。

調査区の中央部では5ヶ所ほどの遺構切り合いの集中ブロックがみられる。このブロックの東側寄りのものからみていくことにする。SE-106・SK-101・204・205・235・237・243・256・263・265の10基の遺構が切り合っている。SE-106・SK-101がもっとも新しく、SK-263・265が古いが、いずれも近世のものと考えられる。SE-106は検出面で2mを測る円形を呈し、断面形が鉢形をなす掘り方をもち、掘り方中央部からやや東寄りに径50cmの井筒がある。底面の標高は2.19mである。土壤はいすれも梢円形から隅丸長方形の平面形をもっている。

SE-106の切り合いブロックの南に、SK-102・201とSK-200・236・SB-162の2グループ



Fig.16 第251号井戸完掘状況

の切り合い関係をもつ遺構がある。SK-102・SB-162がもっとも新しく、SK-236が古い。掘立柱建物については後で詳述する。SK-102は長軸1.2m、短軸0.5m強の隅丸長方形を呈し、床面はほぼ平坦で墳墓状をなしている。この一群の遺構は18世紀前後のものと考えられる。

調査区中央部のSE-106の切り合いブロックの西にSK-104・107・206・207・241・247の6基の切り合い関係をもつブロックがある。SK-104・107がもっとも新しく、SK-241・247が古い。SK-104は長軸1.25m、短軸0.8mを測り、50cm弱の深さをもつ土壤墓状をなしている。SK-107は長軸1.35m、短軸1m弱を測る隅丸長方形を呈し、30cmの遺存で、床面はほぼ平坦であるが棚がある。本土壙からは、鋼・錫・鎧など多量の魚骨や獸骨、鉄滓、瓦などが出土した。このブロックは出土遺物から、近世初期から18世紀のものといえよう。

調査区中央部のSK-104の切り合いブロックの南にSK-90・105・170の3基の切り合い関係をもつブロックがある。SK-90がもっとも新しく、SK-170が古い。いずれも比較的大形の土壙で、SK-170は近世初期、SK-90は近世末から現代（明治）のものと考えられる。

調査区中央部からやや西寄りにSK-87・96・109・110・207・242・245・246・248～250・264の12基の切り合い関係をもつブロックがある。SK-87・109・110がもっとも新しく、SK-264が古い。各土壙の平面形は円形・隅丸長方形・不整方形を呈し、SK-87・109・110は近世末から現代（明治）と考えられる。SK-264は井戸の井筒と考えられ、底面の標高は1.67mで中世末頃か。同ブロックの南に近世末から現代（明治）のSK-88がある。

調査区の西南部は、SK-91～93・95・163・168・169・210・238・261・262・267、SE-251の13基の遺構が点在している。SE-251は検出面で径1.1mを測る筒状の掘り方をもち、掘り方

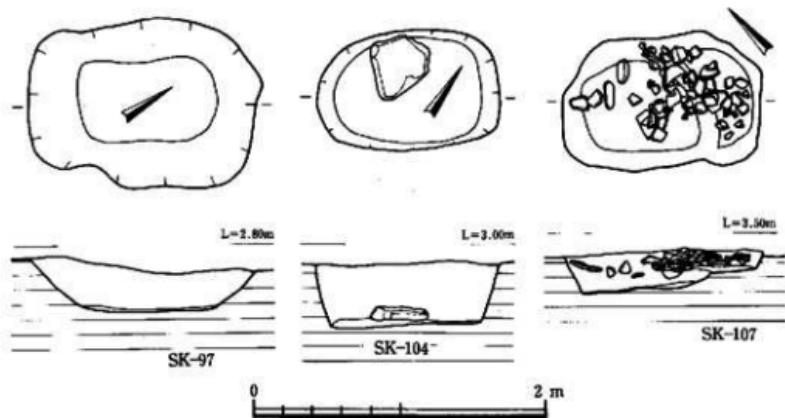


Fig.17 第97・104・107号土壙(SK-97・104・107)実測図

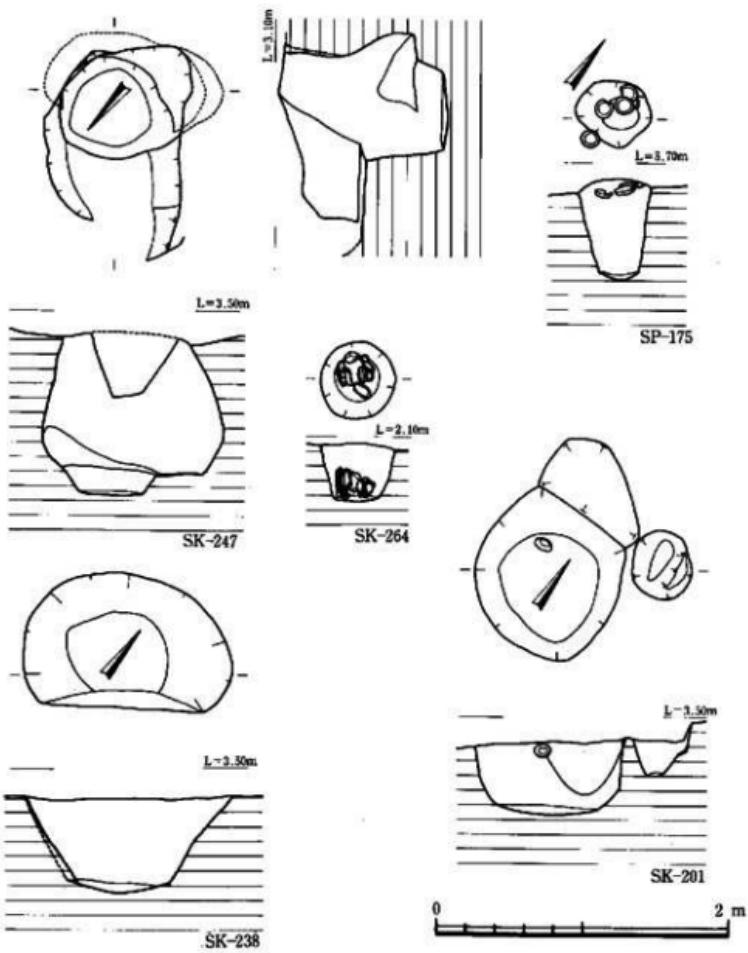


Fig.18 第201・238・247・264号土壙(SK-201・238・247・264)

および第175号柱穴 (SP-175) 実測図

中央よりやや北寄りに径60cm弱の井筒をもっている。底面の標高は1.55m。近世初期か。SK-91・169は隅丸長方形を呈し、前者は長軸1.4m、短軸1.1mを割り、50cm前後の遺存で床面はほぼ平坦である。他の土壙は径1.2m前後を測る円形を呈している。SK-91~93などは近世初期、他は中世末まで遡るか。

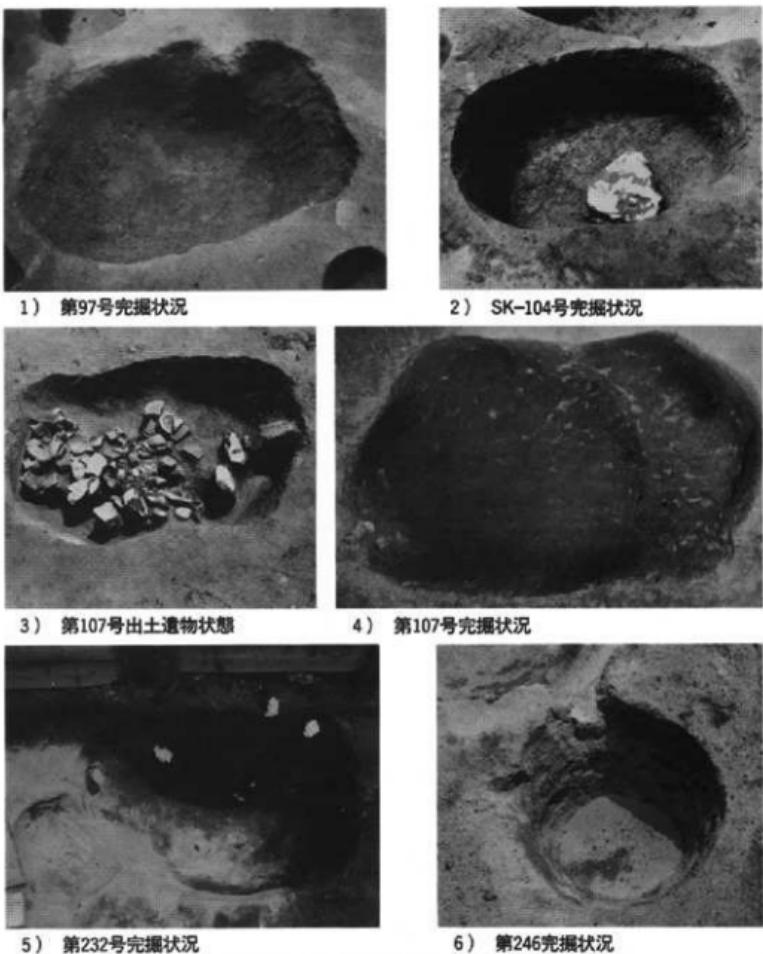
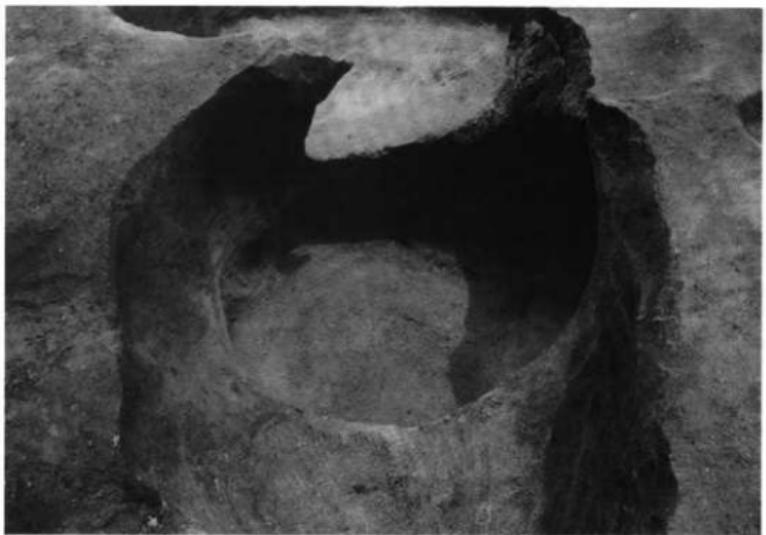
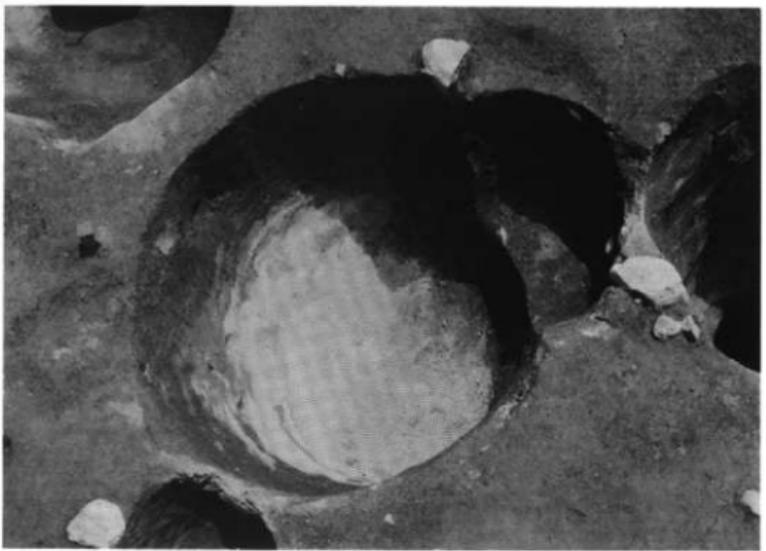


Fig.19 第2面土壤検出・完掘状況

調査区の西北部ではSK-507・509～512・514(515は握り方)・517～519・521～524・529の14基の土壌を検出した。SK-514は長軸1.3m、短軸0.9mの木棺が埋置されている。SK-519は長軸1.5m、短軸0.8mを測り、50cm前後の遺存で床面はほぼ平坦で、壁は床面からやや開き気



1) 第247号土壤



2) 第261号土壤

Fig.20 第247・261号土壤完掘状况



Fig.21 第175号柱穴遺物出土状態

味に立ち上がっている。土壤基か。SK-511は隅丸方形、他は円形から不整円形を呈する土壤である。SK-514・519は近世初期（17C前半）、他は中世末から近世（16～17C）のものと考えられる。

なお、西側にN-31.5°-Wの方位をとるSD-266があるが、これについては第3面で溝状遺構をまとめて詳述する。

第2面では多数の柱穴を検出したが、建物としてまとめることができたのはSB-162の1棟である。SB-162は調査区の中央部から東寄りに位置し、SK-200を切っている。1×2間分を検出したが、本来の規模はまだ大きくなると考えられる。柱穴底に礎石がある。現段階ではN-38.5°-Eの方位をもっている。18世紀後半頃か。

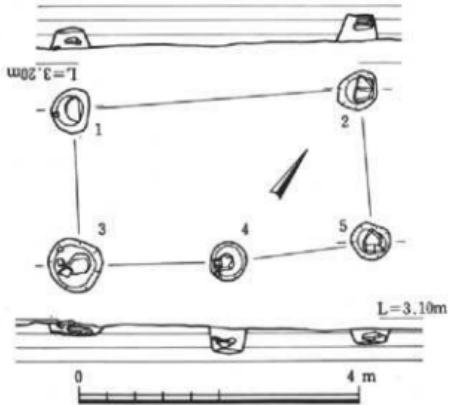


Fig.22 第162号掘立柱建物（SB-162）実測図



Fig.23 第162号掘立柱建物検出状況

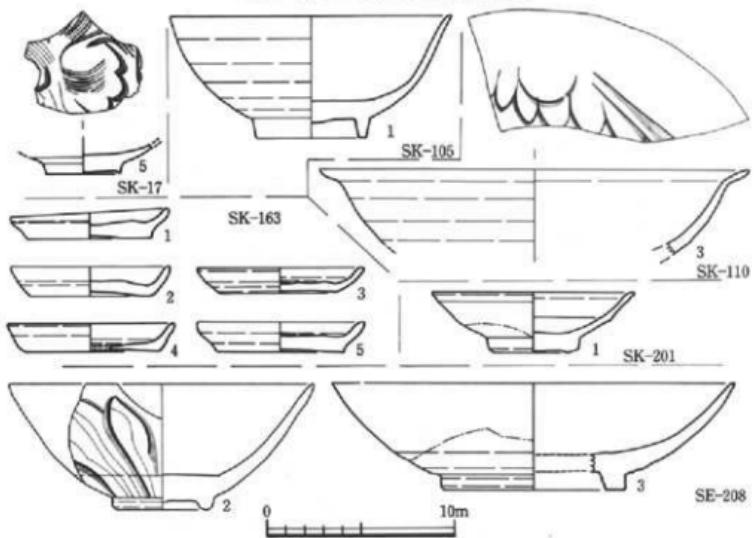


Fig.24 第1・2面検出遺構出土遺物実測図

2) 第2面検出遺構出土遺物

SK-87 (Fig.10)

1は金銅製釣り金具、2は銅製釘留し。3は油次形で天目釉のかけられた陶器であり、高さ17.3cm、底径8.2cmをはかり、口径は2.6cmと小さい。露胎の底部は暗赤色であり、重い作りである。博多遺跡群第43次調査において類品が出土している。

SK-88 (Fig.10)

SK-17の1~3と同じもので、手づくねの小型の容器で、鉛滓が固着。

SK-89 (Fig.10)

1は小形の白磁高坏で、外底のみ露胎とし、屋号様の墨書きがみられる。肥前陶磁器である。
2は巴文の軒先丸瓦。3は煙管の吸い口、4は「寛永通宝」である。

SK-90 (Fig.25)

1は人形の土製型で、外面はこけし型を呈し、手づくねで型合わせの刻み線がつけられている。内面は平滑になり、面貌などがかたどられ女子人形である。1の高さは外側で、21.0cmをはかる。3は肥前陶磁器の瓶で、茶色釉が掛けられ、赤みをおびた露胎の底部に「淡 萬□拾五本」の墨書きがある。4は青白釉がかけられた舟形のもので、「住吉丸」と型づくりされ、上下端に穿孔があり、板などに釘止めされていた装飾品であろう。内面は無釉である。5は杏形、7は白磁で各々に墨痕、6の土器には型押し文字の「躍」がみられる。

SK-91 (Fig.10)

1は骨製の耳搔き棒、2は滑石製の鍤で、長さ5.6cmである。3は金銅製の鉈で長径3.3cm。

SK-95 (Fig.10)

1は青花白磁の饅頭心型の碗で、見込みには牡丹文を描き、高台内に「永保長春」の字款を入れる。2は瓦質の茶釜で、黒色に焼した器面にヘラミガキの痕を残している。口径27.0cm。

SK-100

瓦質の壺の底部に、幅4.2cmの柵目の板状の圧痕が強くついている。底径は11.6cmをはかる。

SK-102 (Fig.10)

小形の軒丸瓦で、三巴文の尾はかなり長く、珠文は11個であろう。径12.8cm。石鍤共伴。

SK-104 (Fig.25)

「大觀通宝」(1107)と「太平通宝」(977)を検出した。

SK-105 (Fig.24・26)

1は白磁碗で、口径15.1cm、高さ6.3cm。光沢のある釉が腰まで掛けられ、体部外面は4段にわたって削りが施され、高台内に径3cmほどのこげ茶色の焦げ跡が見られる。2は鉄製釣針。

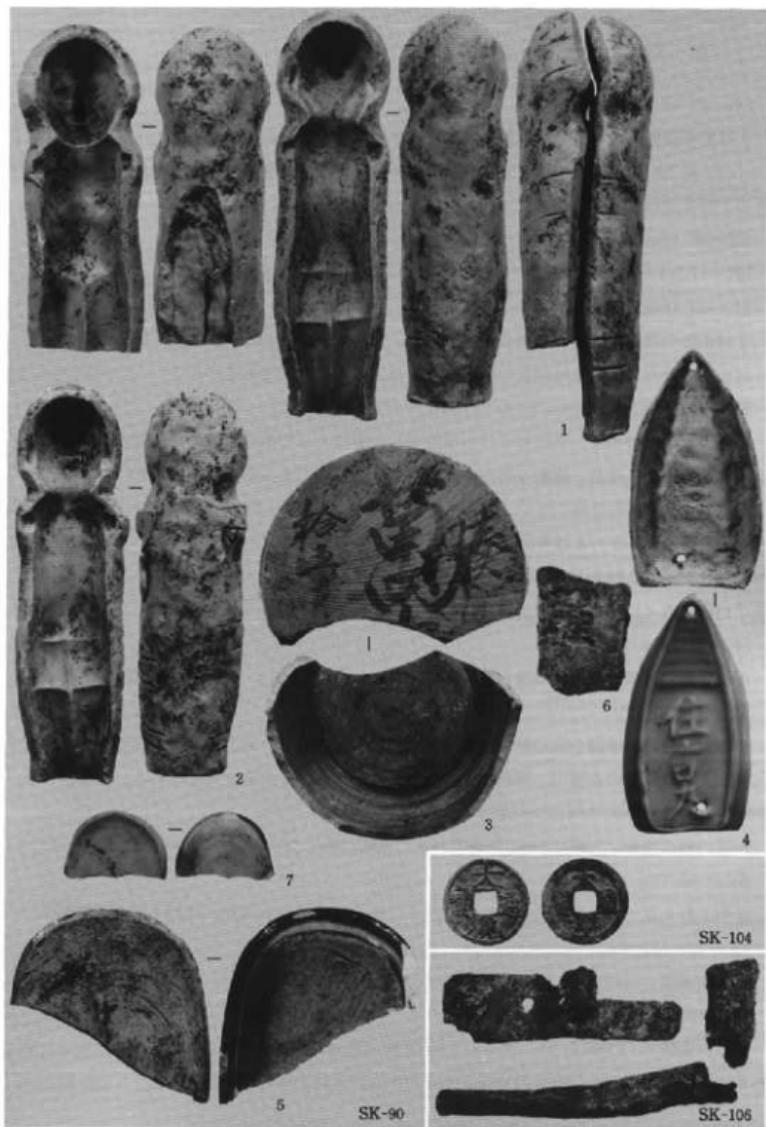


Fig.25 第90·104·106号土壤出土遗物

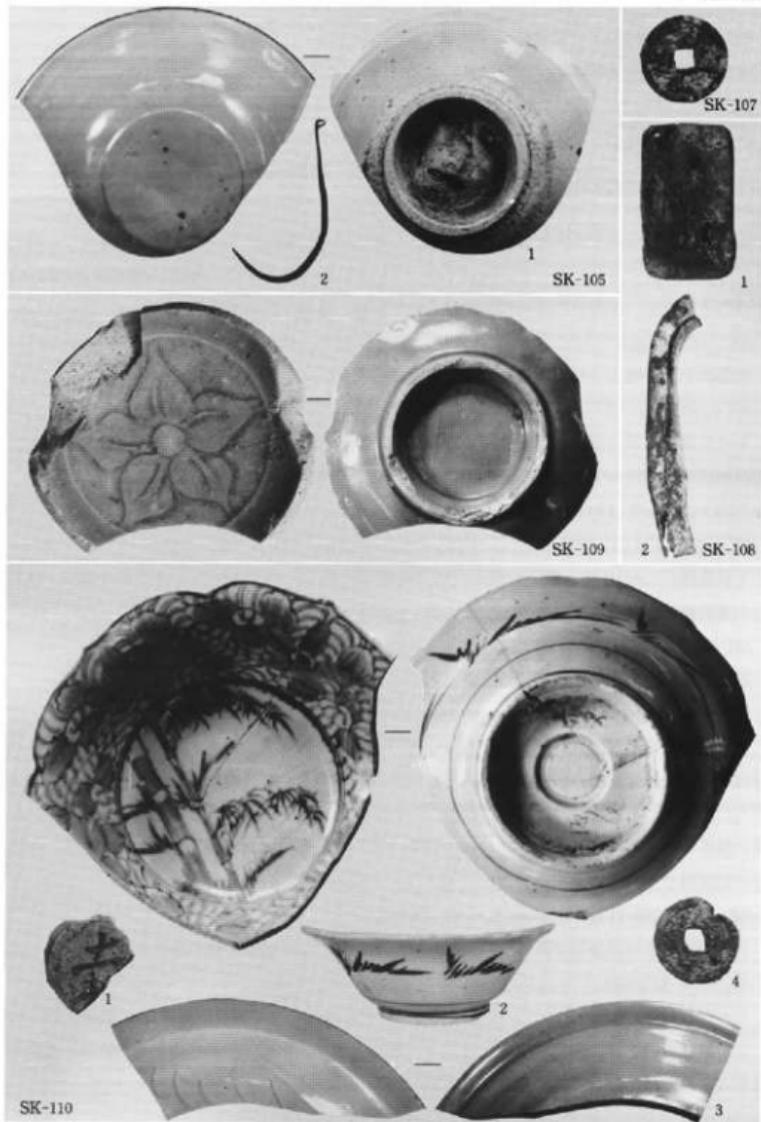


Fig.26 第105・107~110号土壤出土遺物

SK-108 (Fig.26)

1は銅製の直方体容器で(4.8×2.3×0.9cm)一端に注口をつける。2は雁首。

SK-109 (Fig.26)

伊万里青磁の皿で、見込みに5弁の芙蓉を片切彫りであらわしている。白い露胎にかけられた釉は墨付を除いた総釉で、緑青色に発色している。底径7.2cm。

SK-110 (Fig.24・26)

1は土師器の小皿で1字分の墨書がある。2は、伊万里染付鉢で口縁を稜花につくり、見込みに竹文、周囲に草花文をうすい呉須で描いている。外底に朱書で「赤間」「源七」とある。3は伊万里青磁皿、淡緑色の透明釉がかけられている。4は「寛永通宝」。

SK-163 (Fig.27)

土師器小皿を検出し図示するとおりである。

SK-170 (Fig.27)

1は8世紀の須恵器、2は焼き締めの擂鉢で、喇叭形に開く器形で、口縁下に段をつける。腰付近以下は粗くヘラケズリし、内面の櫛目は12本を単位としている。口径32.5cm、底径12.4cm、高さ13.8cmをはかる。肥前地方の製品であろうか。

SK-201 (Fig.24, 27)

1は底径4.8cmの小皿、露胎の高台内に墨書は「李口」、2は図示したような小皿で、灰白色の透明釉がかけられている。

SK-207 (Fig.24)

銅製刀装具が出土した。

SE-208 (Fig.24・27)

1は口径8.1cm、2は口径8.3cmともに小形の糸切り土師器皿である。3は白磁碗V類で、内底は降灰が全体に固着し、露胎の外底部に花押墨書があり、井筒内から検出した。4～6は掘方内の出土で、4は高台内に花押の墨書、5は22.2cmの口径、器高6.0cmの皿であり、内底に輪状に釉をかきとり約2cmおきに砂目がついている。6は竜泉窯青磁碗。他に「開通元寶」1枚、菱形銅装飾り金具1点が出土した。

SK-235・237 (Fig.28)

SK-235の2は銅製煙管吸い口の潰れた状態で、SK-237は無文鏡である。

SK-238 (Fig.28)

1の皿は口径7.3cm、2の环は口径11.7cm、いずれも糸切りで板状圧痕のない土師器である。3の竜泉窯青磁皿は、内底中央に牡丹文を比較的大きく印花し、若草色の釉をかける。外底の掘き取られた露胎部は赤みを帯びる。14世紀代の製品。



Fig.27 第163・170・201・207・231号土壤および第208号井戸出土遺物

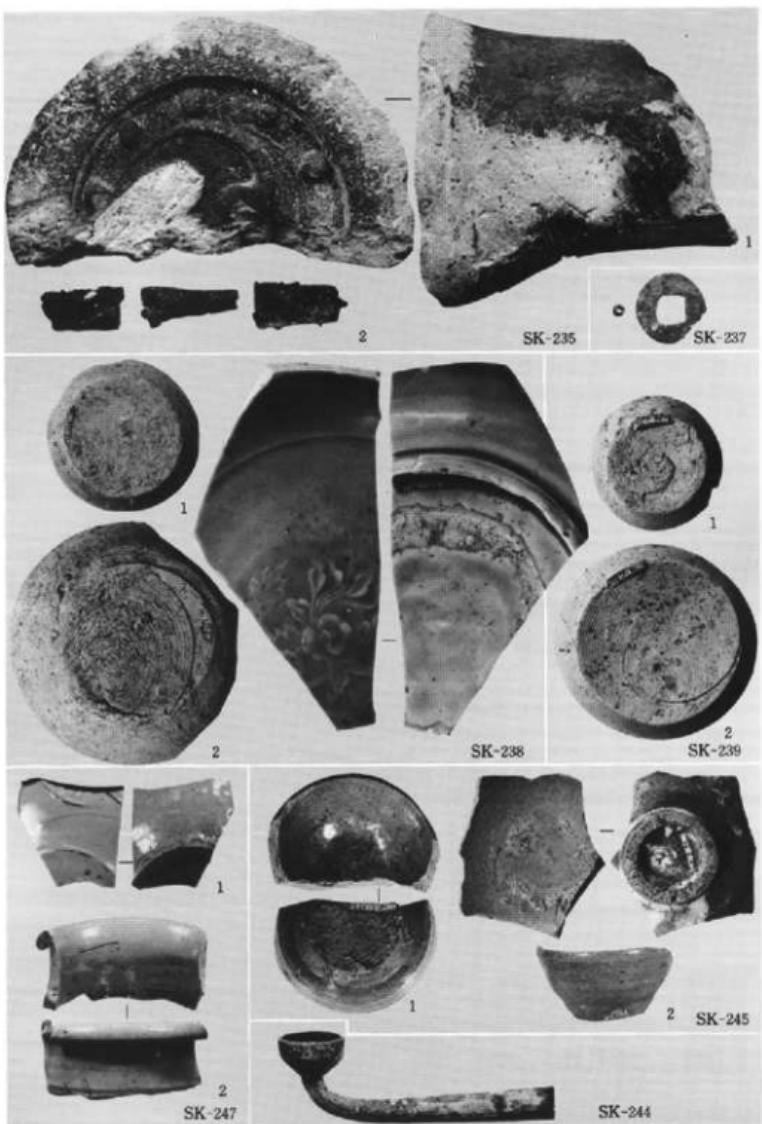


Fig.28 第235・237～239・244・245・247号土壤出土遺物

SK-239 (Fig.28、Tab.1)

土師器皿、坏が出土、計測値は表のとおりである。

SK-243

灰褐色の石製長方形硯であるが(幅5.4cm)、砥石に転用され、中央部に深さ0.6cmの溝がある。

SK-245 (Fig.28)

1は、口径7.8cm、高さ4.4cmの小形碗で、平底に糸切り痕と砂目がつく。淡い緑色の灰釉がかけられている。唐津窯製品。2は、高台の骨付のみ露胎とする雜釉の碗、内外底に砂目が輪状についている。朝鮮製品。

SK-246 (Fig.29)

朝鮮製の碗が2点で、1は白磁碗の三日月高台で、内ぐりは斜めに削り赤みをおびている。内底には4個の胎土目がつく。釉は失透性で少し青みをおびる。2は灰色の純釉で外底はかいらぎ状を呈し、5個の砂目が付着。高台は三日月形で、径5.7cm。

SK-247 (Fig.28)

1は白磁碗で、内面にヘラ書き文、2は白磁四耳壺。

SK-261 (Fig.29)

完形に近い瓦質の茶釜を検出している(2)。口径15.0cm、底部を欠損しているがおおよその高さ30cm程度と思われる。胎土は灰色で硬質に焼成されており、幅2.7cmの鈎をめぐらした上に獸首銀1対を貼付。1は青白磁平形合子の蓋であるが、この他に、青花茶筒底の皿、明代白磁皿を検出しておらず、この土壤は16世紀。

SK-265 (Fig.29)

瓦質の土風炉とみられる。口径20cm程度で堅く焼き締まり、内面にいわゆる蓮根皿を受ける突起を貼付けている。

SK-268 (Fig.29)

1の青磁底部は、越州窯か竜泉窯製品とみられる。外底に砂目跡を残し、釉は黄緑色である。2は鉄絵盤の底部で、釉は淡い薄緑に呈発し、絵柄の様式は古式である。

SK-286 (Fig.29・58)

1は白磁皿、口径9.7cm、内底を輪状に釉剥ぎする。2は、純釉の青磁碗で、疊付きと内底に大きな砂目跡を付け、胎土はやや粗い高麗青磁である。3は福建省同安窯系青磁碗、高台を斜めに削り、胎土は灰色に焼き締まっている。

SK-511 (Fig.30、Tab.2)

土師器は糸切りで、板状圧痕がない。5は器肉2~3mmと薄く、底部から直線的に体部を開いており、他の坏と異なる。備前窯擂鉢が共伴している。

Tab.1 第239号土壤出土土師器計測表

No.	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	6.4	4.6	1.5	○	ナシ	
2	坏	9.4	7.4	1.5	○	ナシ	

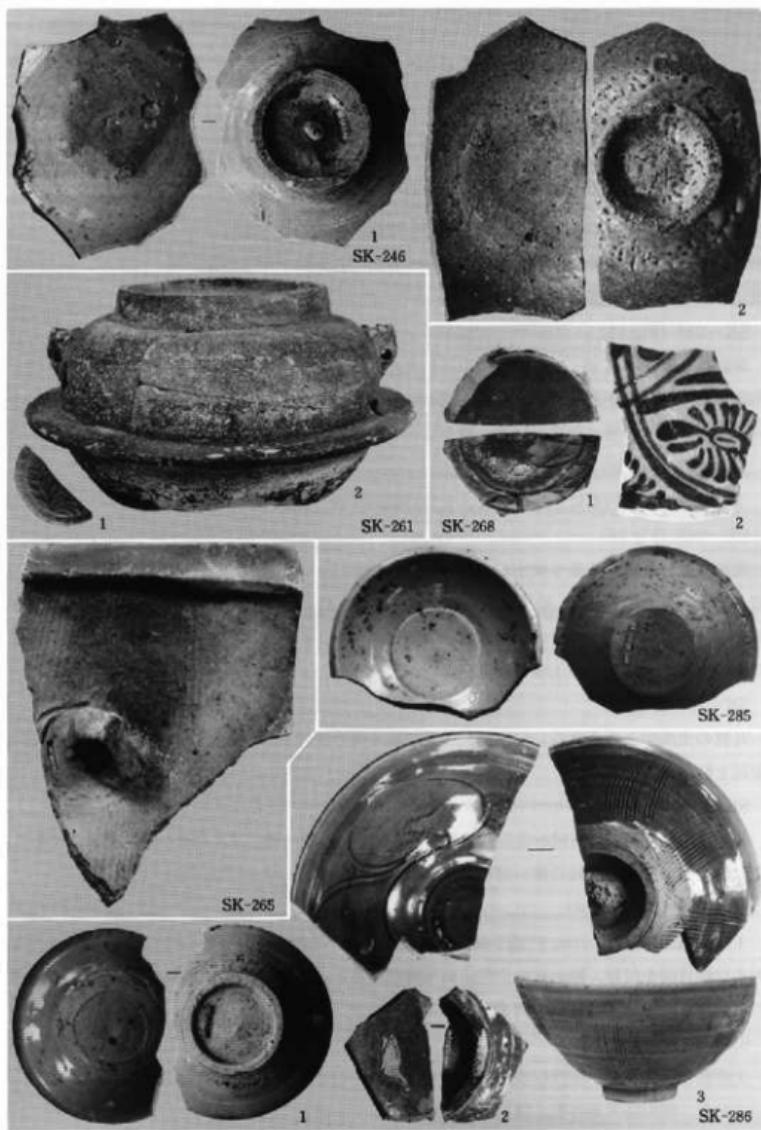


Fig.29 第246·261·265·268·285·286号土壤出土遺物

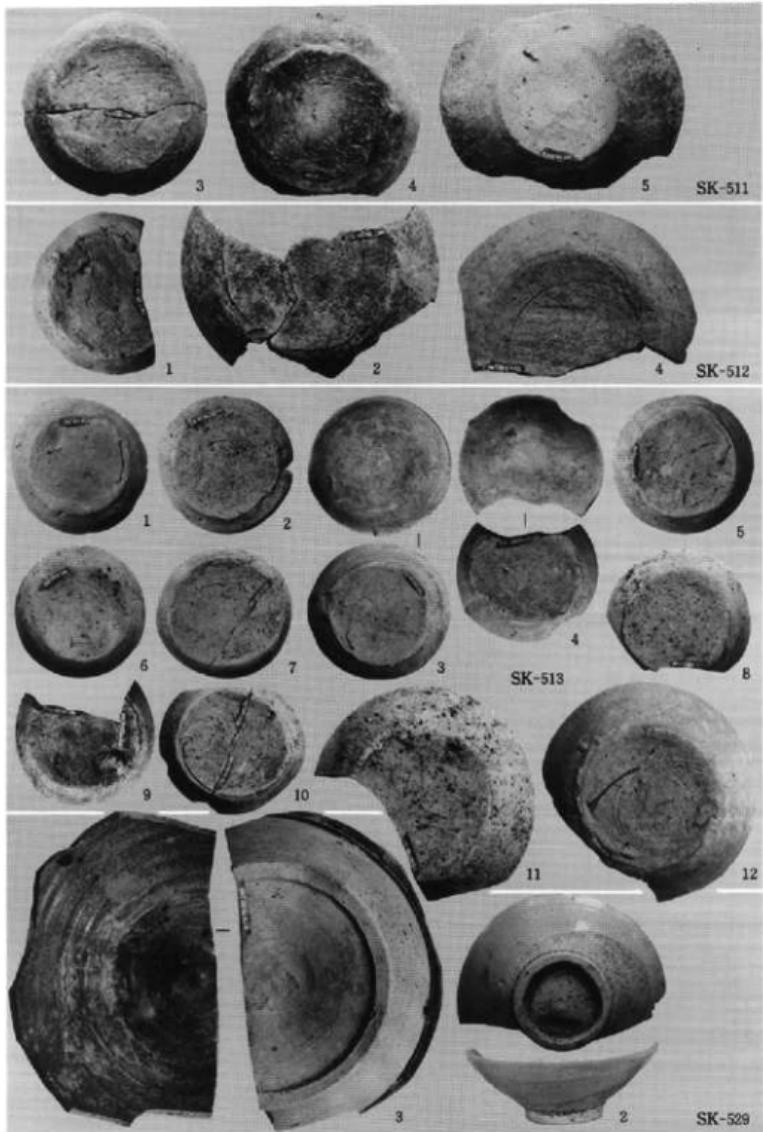


Fig.30 第511~513・529号土壤出土遺物

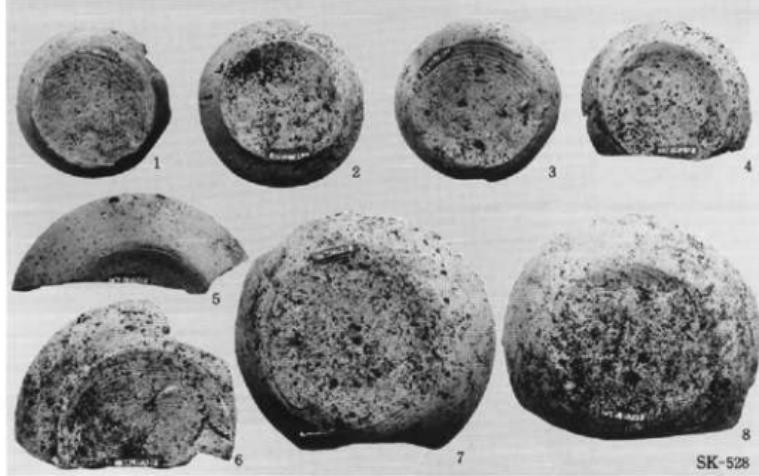
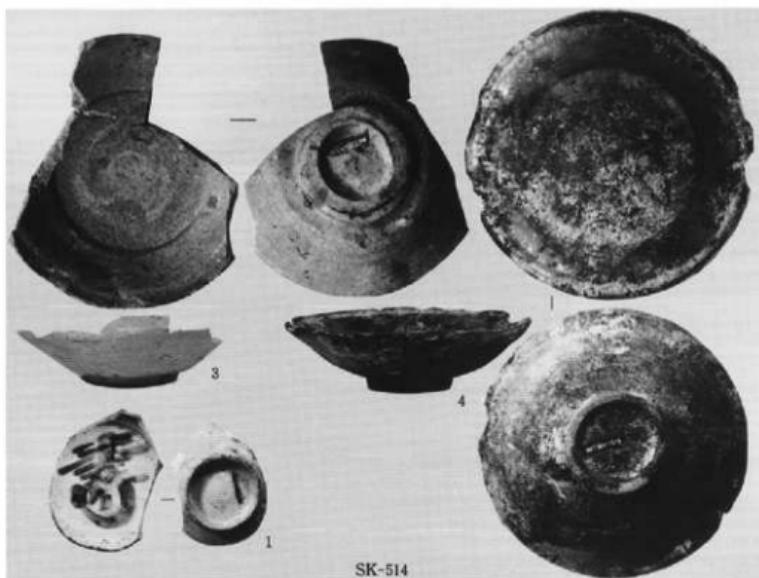


Fig.31 第514・528号土壤出土遺物

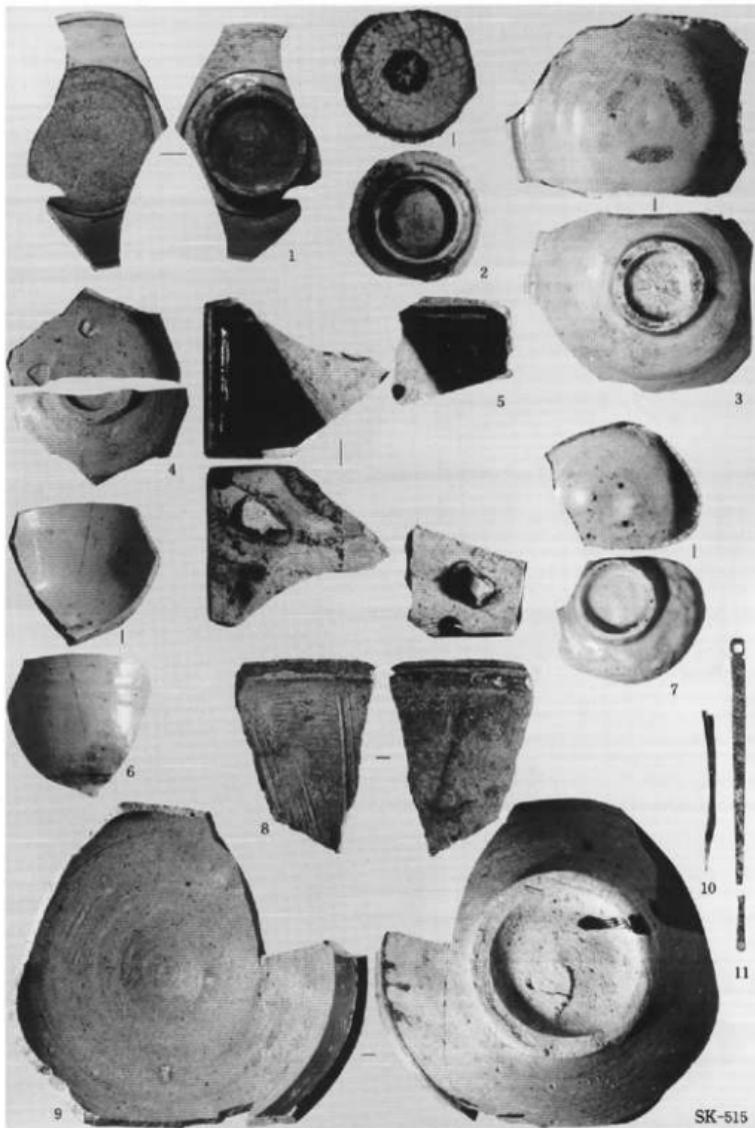


Fig.32 第515号土壤出土遺物

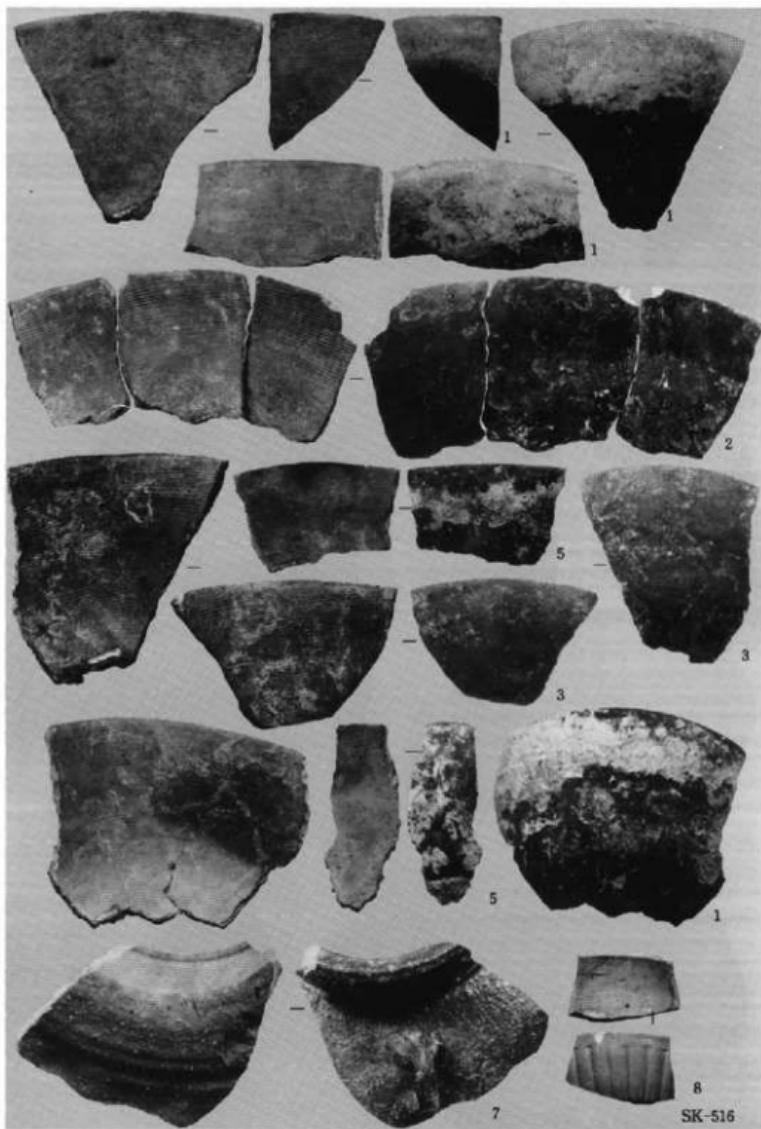


Fig.33 第516号土壤出土遺物

SK-513 (Fig.30, Tab. 3)

土師器が10数点まとめて出土した。すべて糸切りであり実測図に示すとおりである。

Tab. 2 第511号土壤出土土師器計測表

No	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	10.0	6.0	2.2	○	ナシ	
2	皿	10.8	9.2	2.2	○	ナシ	
3	皿	10.2	7.0	2.2	○	ナシ	
4	皿	11.0	7.5	2.2	○	ナシ	
5	壺	13.5	6.2	2.6	○	ナシ	

Tab. 3 第513号土壤出土土師器計測表

No	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	7.8	5.5	1.2	○	ナシ	
2	皿	7.7	6.0	1.0	○	○	
3	皿	7.8	5.5	1.2	○	○	
4	皿	8.0	6.0	1.2	○	ナシ	
5	皿	7.8	5.7	1.5	○	ナシ	
6	皿	7.5	5.0	1.0	○	ナシ	
7	皿	7.5	6.4	1.2	○	ナシ	
8	皿	8.0	6.0	1.2	○	ナシ	
9	皿	8.0	6.0	1.2	○	ナシ	
10	皿	8.0	6.0	1.2	○	ナシ	
11	壺	12.7	8.0	2.7	○	ナシ	
12	壺	12.0	7.0	2.7	○	ナシ	

SK-514 (Fig.31)

1は青花碗でクリーム色の釉が疊付を除いてかけられ、内底に淡い真須で「壽」字がある。3は唐津窯皿で、砂目。口唇を上に折り上げ、釉は淡い黄色透明であり、外体部下半までかけられている。4も3とよく似た皿である。全体に油煙がこびりついている。これらに共伴して芙蓉手青花皿があり、17世紀前半の時期の遺物の組み合わせである。

SK-515 (Fig.32)

16世紀末～17世紀初めの遺物をまとめて検出した。1、2は明代後半の青花であり、1は高台と内底を露胎とし鉄分の多い砂目の胎土である。2は見込み中央に花文を入れる青花で水裂が多い。いずれも白地が渦り粗製の青花である。3は朝鮮白磁碗で、クリームホワイトの純釉で疊付のみ釉を削りとり砂が付着する。見込みに3個の目跡、口縁端部を上に小さくまみあげている。4は胎土目唐津皿で、内面に淡緑の透明釉がかかる。底径4.4cm。5は織部型造り角型皿で2片になっているが同一個体とみられる。短辺7.9cmを測り、環状の足を四隅につける。鋼線釉を染め分けし、内底の布目地土に鉄絵を描いている。胎土は淡黄色、外底部は無釉で削りがみられる。6、7は類似の碗で、灰色をおびた釉がかかり、7では疊付に砂が付着する。いずれにも内底に目跡は認められない。8はレンガ色をした壺鉢で内面は横方向にはけ目、5～6本単位のすり目を入れ、口縁の突帶は貼付である。9は鉢形品で、口径17.6cm、高さ9.2cmの大きさである。赤変した胎土に、口縁の内外に幅5cmほどの帯状に茶色釉をかけている。10は銅製品。11は銅製簪とみられ、長さ8.6cm、下端は耳搔きを作り、上端の孔の下から斜めに複線の刻み目を入れ、中位には両側から抉りを入れている。

SK-516 (Fig.33)

径33cmほどの土鍋を少なくとも5個体検出した。いずれもよく使用された後に廃棄された状況を伺わせ、外面に煤がこびりつき、かつ大破している。内外面に粗いはけ目調整を施し、口

縁部はヨコナデ調整をしている。胎土は比較的精製され、焼成も赤褐色で堅い土師器である。共伴する7は備前窯の壺、8は青白磁、この他に備前窯擂鉢、土師器糸切りの壺がある。

SK-517 (Fig.)

底径11.8cmの折縁の青花中皿である。見込みは複線八角形内に花鳥文をかなり濃く染め付けている。内側面は区画内に花卉文と八宝文を交互に配しているようである。側面は型打ち成形で、いわゆる芙蓉手をしている。疊付きのみ釉を削り取っているがこの付近に砂がかなり多く付着している。16世紀末～17世紀前半の景德镇窯製品であろう。これと共に出土する陶磁器は、唐津窯二彩刷毛目文大皿、見込み釉はぎ青緑釉皿、擂鉢、伊万里白磁および染付けなどで17世紀後半のものが多い。

SK-528 (Fig.31・34)

土師器皿、壺がまとまって出土しているが、いずれも糸切りで、板状圧痕が認められない。

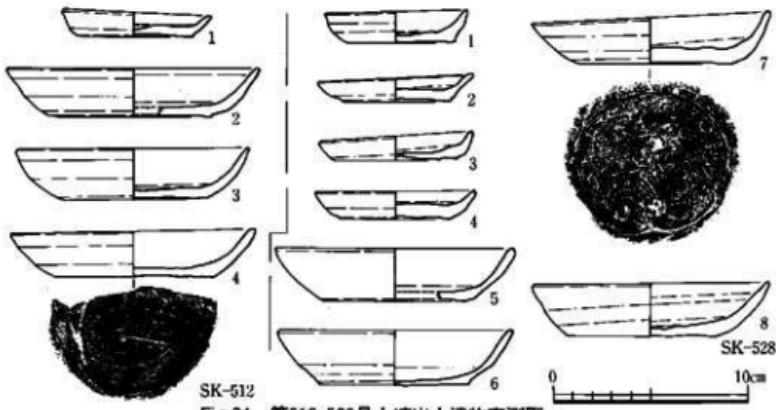


Fig.34 第512・528号土壤出土遺物実測図

SK-529 (Fig.30, 35)

2は宋代白磁の小碗で、口径10.1cm、体部を直線的にのばしている。3は梅釉壺の底部で、腰より上に黒茶色の釉がかけられ、露台部分の削り調整や高台の削り出しの輪廻回転は鋭い内面には茶梅釉がかけられている。器肉も薄く肥前の製品であろうか。

SK-231 (Fig.27)

三巴文の軒丸瓦で、面径15.0cm、砂質の胎土である。

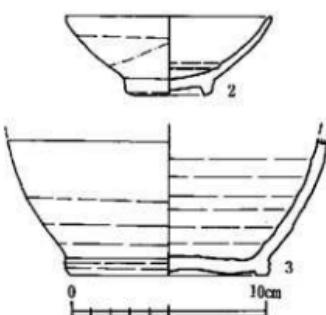


Fig.35 第529号土壤出土遺物実測図

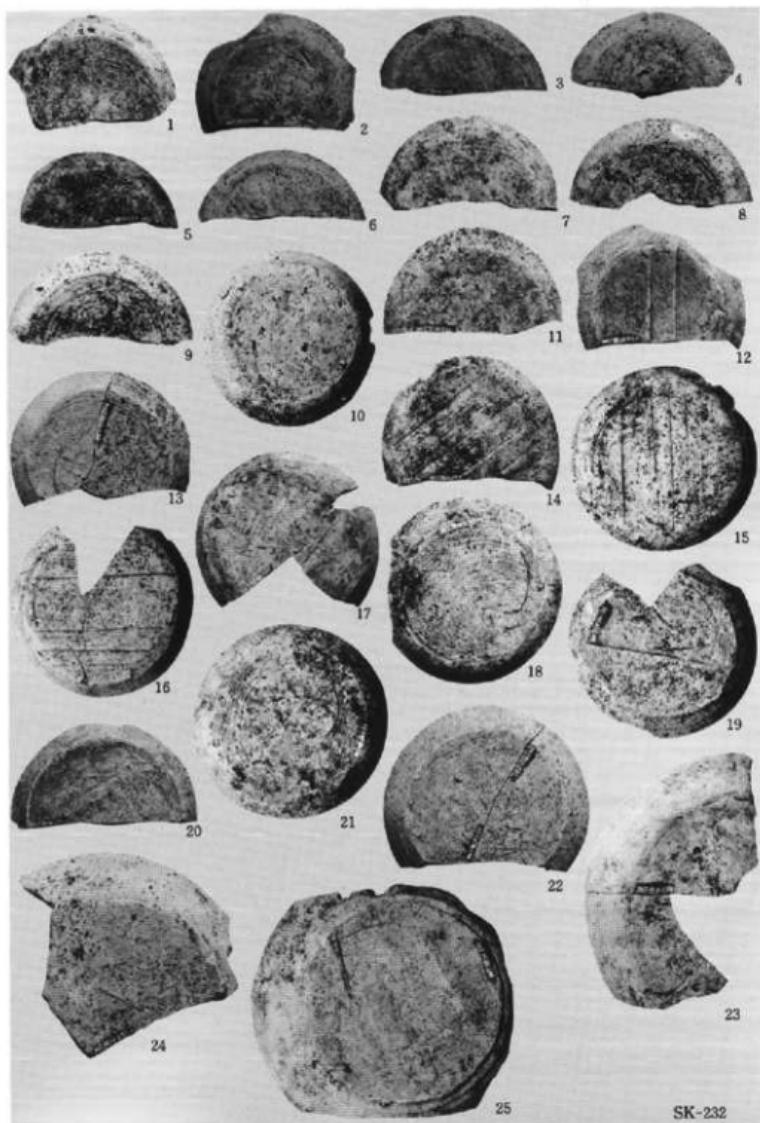


Fig.36 第232号土壤出土遺物（1）

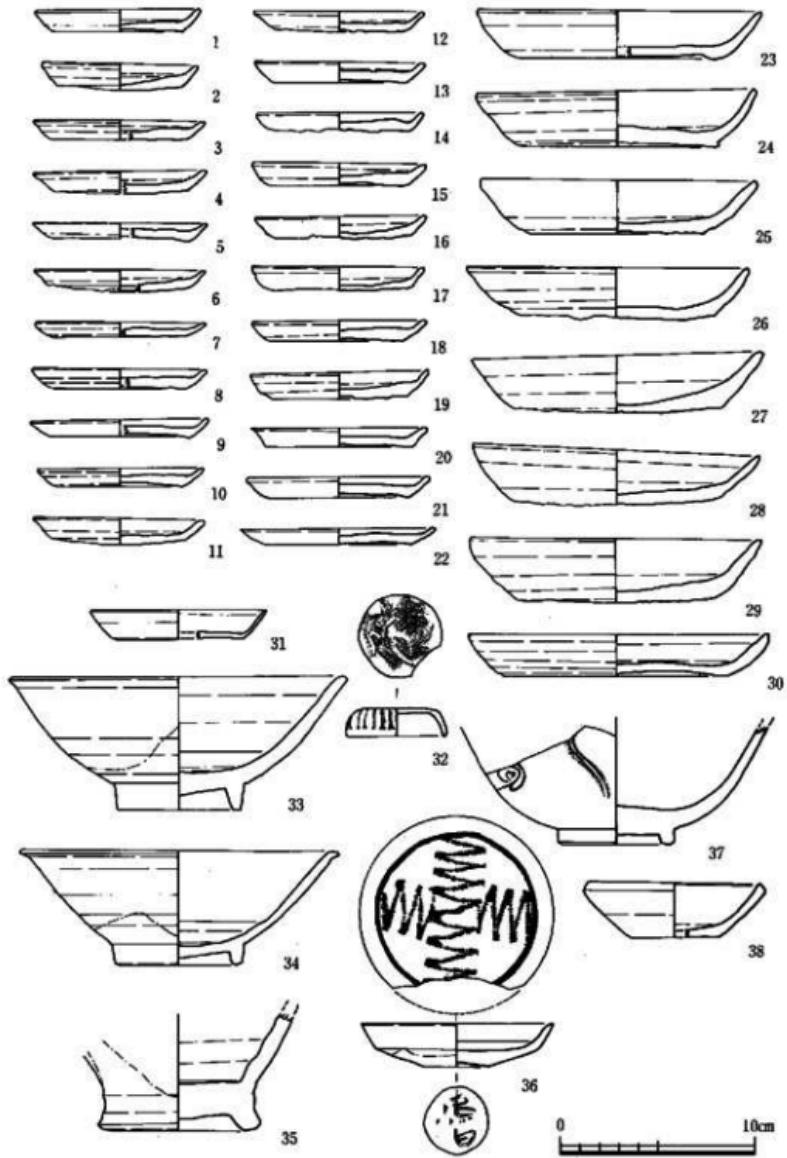


Fig.37 第232号土壤出土遺物実測図

SK-232 (Fig.36~39, Tab. 4)

12世紀後半代の遺物がかなりまとまって出土した。土師器皿は、9.0cm前後の口径をもち、すべて糸切りである。坏も同様の底部切離しのみで、口径15.0cm前後のものが多い。31は白磁芒口皿であるが、少し青みをおびた釉が滑らかにかかり、13世紀代のものとは異なる。口縁内外の釉の搔きとされている部分が幅広である。図示した以外に同種品が他4点あり（写真参照）、これらは口径9.3~10.9cmと、いずれも13世紀のものより大きい。32は青白磁の合子蓋の通有品であるが、天井部の型造りの草花文の脇に1羽の小鳥が表現されている。このデザインは例が少ない。33はV類の白磁碗で、胎土が軟質、黄白色である。34は内底の白色釉を輪状に搔きとり、口縁を水平に折りまげる器形である。釉面に窓跡がつき、ピンホールが多い。35は、白磁四耳盃の底部であるが、胎土に鉄分があるため釉が淡い緑色となっている。疊付に焼成時の砂が付着。36は福建省同安窯系の青磁皿、外底に墨痕がある。37は竈泉窯青磁碗で輪花にするタイプであるが、黄緑色の釉がよく溶け、細かく冰裂文を見せている。38は茶色の胎土にこげ茶色の総釉の粗製皿。

Tab. 4 第232号土壌出土土師器計測表

No.	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他	No.	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	8.4	6.8	1.1	○		?	16	皿	8.9	7.0	1.1	○	○	
2	皿	8.0	6.4	1.3	○	○		17	皿	9.0	7.0	1.2	○	○	
3	皿	8.8	7.0	1.0	○	○		18	皿	9.0	6.9	1.1	○	○	
4	皿	9.0	6.7	1.2	○		?	19	皿	9.1	7.0	1.4	○	○	
5	皿	9.0	7.0	0.9	○	○		20	皿	9.1	7.6	1.1	○	○	
6	皿	8.8	7.2	1.1	○	○		21	皿	9.4	7.2	1.2	○	○	
7	皿	8.8	6.8	0.9	○	○		22	皿	10.0	7.6	0.9	○	○	
8	皿	9.0	6.9	1.0	○		?	23	坏	15.0	10.8	2.2	○	○	
9	皿	9.2	7.0	1.0	○		?	24	坏	14.5	10.6	2.7	○	○	
10	皿	8.5	6.4	1.1	○	○		25	坏	14.0	9.1	2.7	○	○	
11	皿	8.8	6.8	1.4	○		?	26	坏	14.5	10.2	2.7	○	○	
12	皿	8.8	6.2	1.1	○	○		27	坏	15.1	10.6	2.9	○	○	
13	皿	8.8	6.9	1.1	○	○		28	坏	14.9	10.8	2.9	○	○	
14	皿	8.7	7.3	1.0	○	○		29	坏	15.3	10.2	3.2	○	○	
15	皿	9.1	7.1	1.2	○	○		30	坏	15.6	11.7	2.4	○	○	

本土壙は調査区の東側に位置し、SE-164の西5mにあたる。暗褐色の粘土混じりシルトと砂を覆土としている。平面形は橢円形を呈し、軸3.7m、短軸2mを測り80cm前後遺存しているが、試掘溝によって寸断されている。本土壙からは前述しているように、比較的まとまった多くの遺物が出土した。

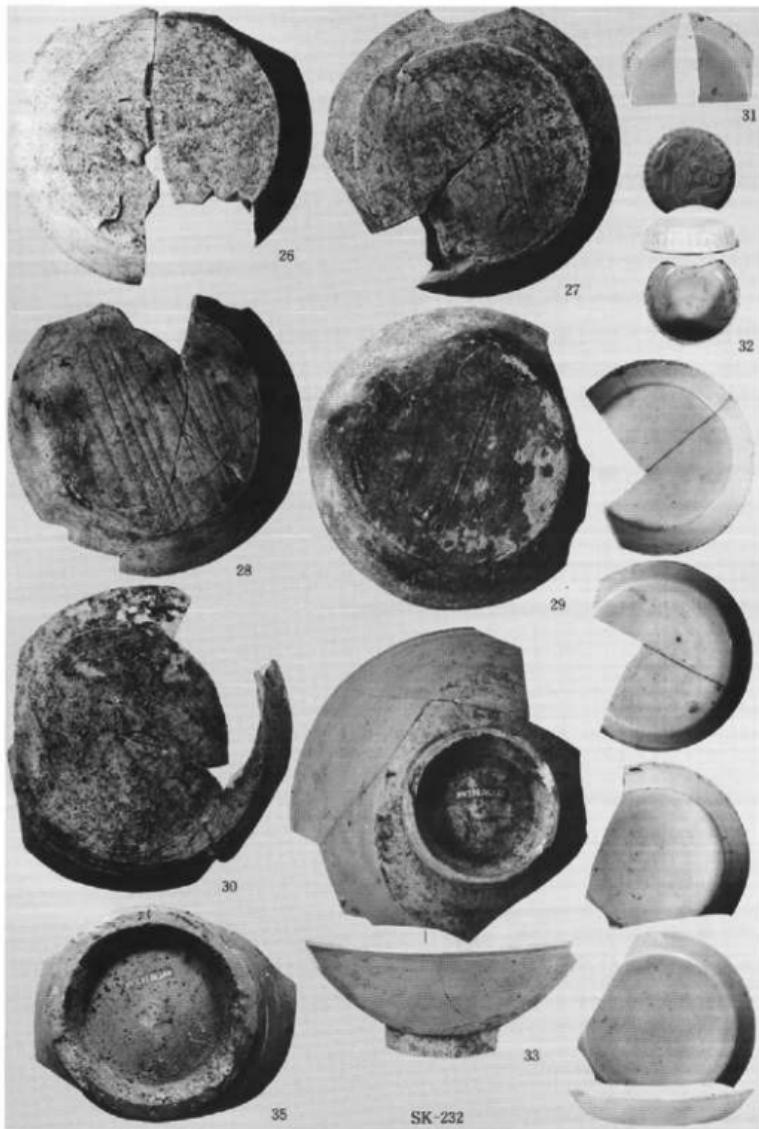


Fig.38 第232号土壤出土遗物（2）



Fig.39 第232号土壤出土遺物（3）

SP-143 (Fig.69)

朝鮮王朝期の雜釉陶の碗で、窯変により白く見えるが、暗緑色の釉の一部が残っている。内底にはぼ圓状につづく砂の焼き台跡がみられる。

SP-149 (Fig.69)

総釉の越州窯青磁碗II類で、ねっとりとした感じの胎土にいわゆるオリーブグリーンの釉が滑らかに溶解し、疊付きにもかけられ、ほぼ1cmおきに砂目がつき、これに対応する内底には牙状の目痕がついている。この群の越州窯には内底に目跡があるものがしばしば認められる。

SP-181 (Fig.68・69)

1は、口径12.5cm、底径9.0cm、高さ2.2cmの土師器坏で、糸切りであるが板状圧痕ではなく、内底はヨコナデである。2は土師器小皿で、口径8.0cm、板状の圧痕を底部につける。これと

もに瀬戸窯の鉢皿がある。

SP-252 (Fig.69)

1は白磁碗で、白色薄胎で光を透過する。釉下に細かい刻線文がみられ、釉の表面に内外ともに細かい黒点がついている。2は黄釉鉄絵盤で、ザラザラの粗胎で化粧土のない部分では黒茶色になっている点が通常のものと少し異なる。

3) 第2面検出時出土遺物 (Fig.40~42)

Fig.41の1は、非常に粗製の胎土(砂目)の鉢で、外面の腰以下は露胎、内面には氷裂のない透明な灰釉がかけられており、残存部には目跡はみられない。2は口径10.5cmの小形皿で、内底に鏡をつくり淡い緑色をおびる透明釉をかける。3は、竜泉窯青磁碗で、内底には花文のスタンプ、透明で氷裂のある釉がかけられているが、露胎の外底には径3.5cmの黒砂の付着した焼き台痕がみられ、12世紀の製品であろう。4は竜泉窯青磁で内底の方形内に文字のスタンプを入れる通有品であるが、施釉された高台の疊付に推定4個の砂目跡がみられる。内底には目跡は認められない。5は高麗青磁碗で、高台が高く直立する形である。本品では欠損しているが高台高さは1.5cm以上であり、疊付のみ露胎としている。透明青磁釉がかけられ、内底に白砂目跡が固着している。6は粗製の青磁碗で、外側は疊付のみを露胎とし、うす緑の釉がかけられている。内底はすべて露胎で、重ね焼きの痕跡をのこす。露胎部分は赤褐色を呈する。体部を

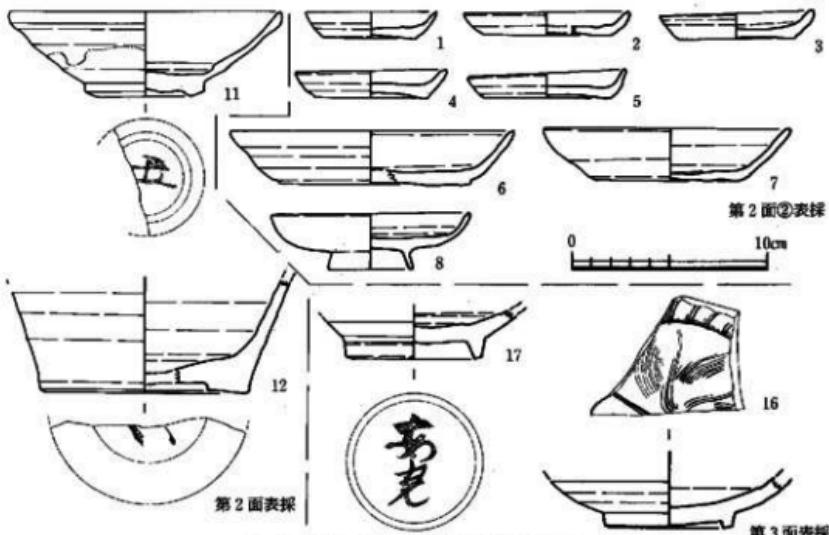


Fig.40 第2・3面検出時出土遺物実測図

直線的にのぼすところに器形上の特色をもつ。7は唐津窯皿、露胎の外底は赤みをおび、釉は暗緑、内底に砂目跡3個をのこす。8は、朝鮮王朝期の雜釉皿で、うす緑色で透明な釉が内外のすべてにかけられ、砂目跡が圓状についている。胎土は灰色、硬質。9の軒先丸瓦は瓦当径14.3cm、左巻き三巴文の周囲の珠文は9個と少ない。このほかに、墨書土器を3点検出し、10は、唐津窯の皿で、露胎の底部に「井」とその周囲にも墨書がみられる。11は白磁碗で、小形の玉縁口縁、内底の縁を一段くぼめている。花押様の墨書があるが判読不能である。12は褐釉の壺で、赤変した露胎の底部にわずかに墨痕の付着が認められる。銭貨は、寛永通宝3、朝鮮通宝、淳祐元宝、元祐通宝、熙寧元宝、嘉祐元宝、皇宋通宝、天禧通宝、開通元宝と不明品。銅製品は簪と刀装具である。

これらと別に、第2面②の層から土師器を7点検出し、図示したとおりである。

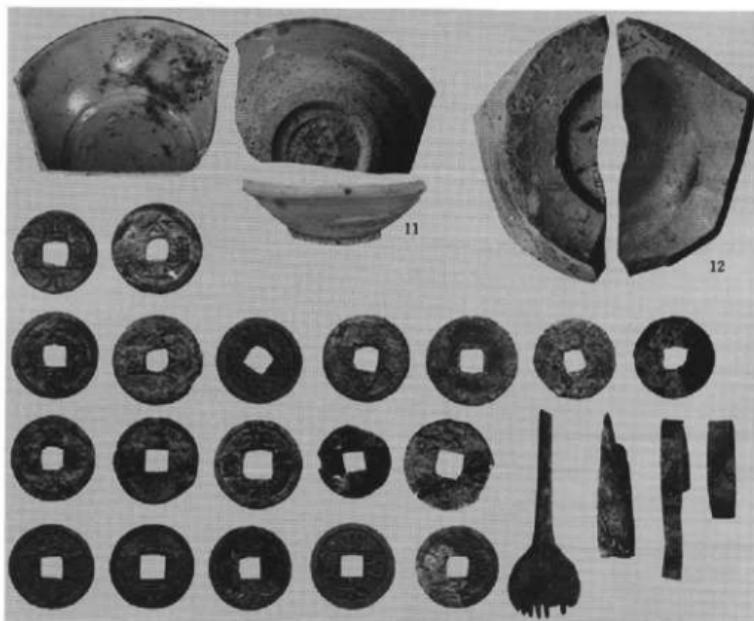


Fig.41 第2面検出時出土遺物（1）



Fig.42 第2面検出時出土遺物（2）

4. 第3面の調査

第3面は西側では第2面とほぼ同じ面でほぼ平坦であるが、中央部から東側は第2面の遺構群を除去したあとなので、凸凹というより継続状をなしている（標高3.47～3.25m）。第3面の遺構は基盤層である黄白色砂に切り込まれており、黒褐色および暗褐色の砂混じり粘質土かシルトもしくは粗砂・細砂を覆土としている。なお、調査期間の制約から、調査区西北部の張り出し部は調査を断念した。

第3面検出の遺構として、SE-284・459など10基の井戸と土壤・溝・柱穴などがある。遺構は調査を実施した分については、遺構が密集状態で検出できた。

第2面検出のSD-266と第3面検出のSD-367はN-36.5°-W、N-37.5°-Wとほぼ同じ方位をとり、西側肩部を共有し、同一溝と考えられる。SD-367とSD-366は溝中心間で28mの間隔で平行し、SD-335はSD-366と中心間で4.5mの間隔で平行している。SD-335・336間は道路の可能性が高いといえる。また、これらの溝は第40次調査検出の第20号溝

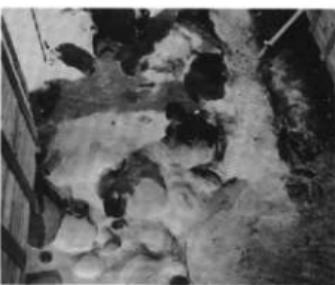


Fig.44 第3面東側遺構分布状況

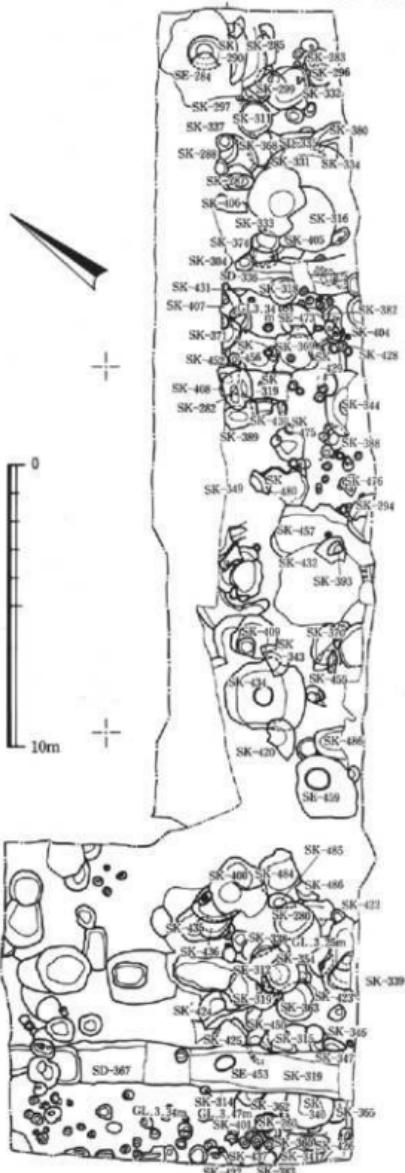


Fig.43 第3面遺構分布図

(N—51.5'—W) にほぼ直交し、時期的には14世紀から16世紀頃のものと考えられ、中世都市博多の町割りを考えるうえで参考となる（大庭康時編1990『博多15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集）。

第3面検出の遺構は出土遺物から、8世紀後半から16世紀後半のものまで含まれているが、大半は12世紀後半から16世紀のものである。

1) 第3面検出遺構

第3面も遺構が集中しており、集中ブロックごとにみていくことにする。なお、溝については、第2面の溝も含めて別に述べていく。

調査区の東側（SD—336より東をさす）では井戸1基（SE—284）と土壌21基（SK—283・285・287・288・290・296・297・299・304・311・316・331～334・337・368・374・380・405・406）と溝1条（SD—335）と柱穴を検出した。SE—284はSE—164、SK—268などに切られ、掘り方の下半部から遺存している。1.2m強の円形の鉢形をなす掘り方をもち、ほぼ中央に径60cm前後の井筒があり、井筒には木枠を用いている。底面の標高は1.63mである。土壌は円形を呈するもの（SK—311など）、隅丸方形を呈するもの（SK—322など）、長方形を呈するもの（SK—316など）などがある。SK—299は第2面の遺構に切られているが、平面形は隅丸方形をなすと考え



Fig.45 第3面遺構分布状況

られ長軸1.6m、短軸1.3mを測り、80cm前後遺存し床面は段をなしている。土師器皿・壺・白磁などの遺物が上部から出土した。SK-332はSK-283・296に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、40cm前後遺存し床面は皿状をなし、壁は床から開きながら立ち上がっている。本土墳からは獸骨などが出土した。SK-311は第2面の遺構に切られているが、径1.33m弱の円形で、60cm前後遺存し塊状をなしており、瓦器・青磁と獸骨が出土した。SK-116は長軸70cm、短軸45cmを測る長方形を呈し、30cm前後の遺存で床面は平坦であり土壤墓状をなしている。

調査区の中央部から東寄りでは、第2面の遺構に切られた多数の遺構が切り合った状態で検出できた。この切り合いブロックでは、井戸1基(SE-473)が検出された。SE-473はこの切り合いブロックではもっとも古いと考えられる遺構の一つである。径1.2mを測り、桶状をなしている。床面の標高は1.05mである。土壤には隅丸方形を呈するもの(SK-319・428・456

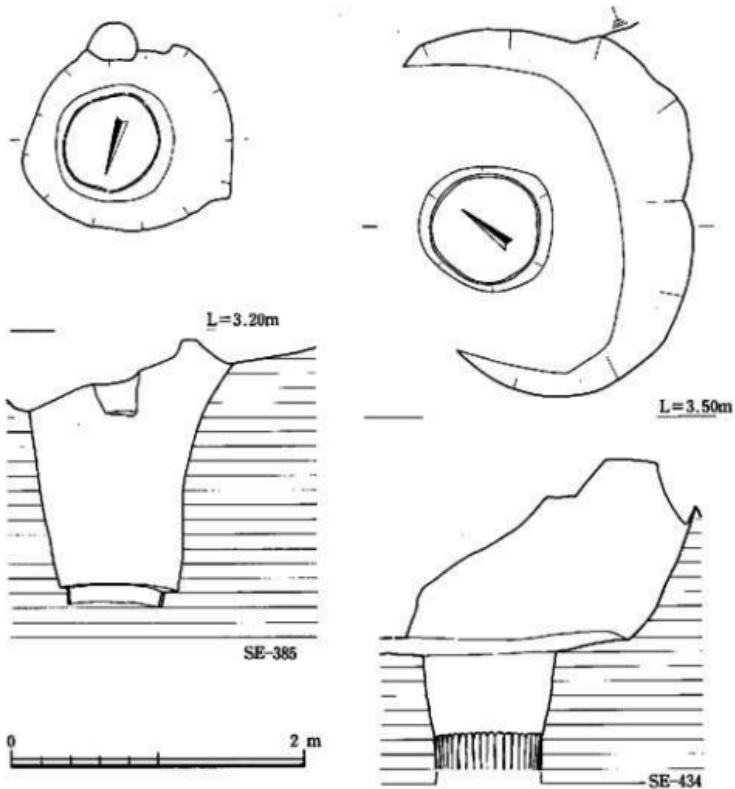


Fig.46 第385・434号井戸 (SE-385・434) 実測図

など)、円形を呈するもの(SK-318など)があり、他の土壙は第2面の遺構に切られ不整形をなしている。この切り合いブロックおよび東側に分布している遺構は、古代(8C後半)から16世紀までのものである。特に古代の遺構は、この切り合いブロックから東側に集中している。

調査区の中央部では第2面の遺構の規模が大きくて深いものが多く、第3面では井戸2基(SE-434・459)と土壙6基(SK-343・370・409・420・486)が遺存している。SE-434はSK-343・420にも切られているが、2.5m前後の隅丸方形を呈する掘り方をもっていたと思われる。

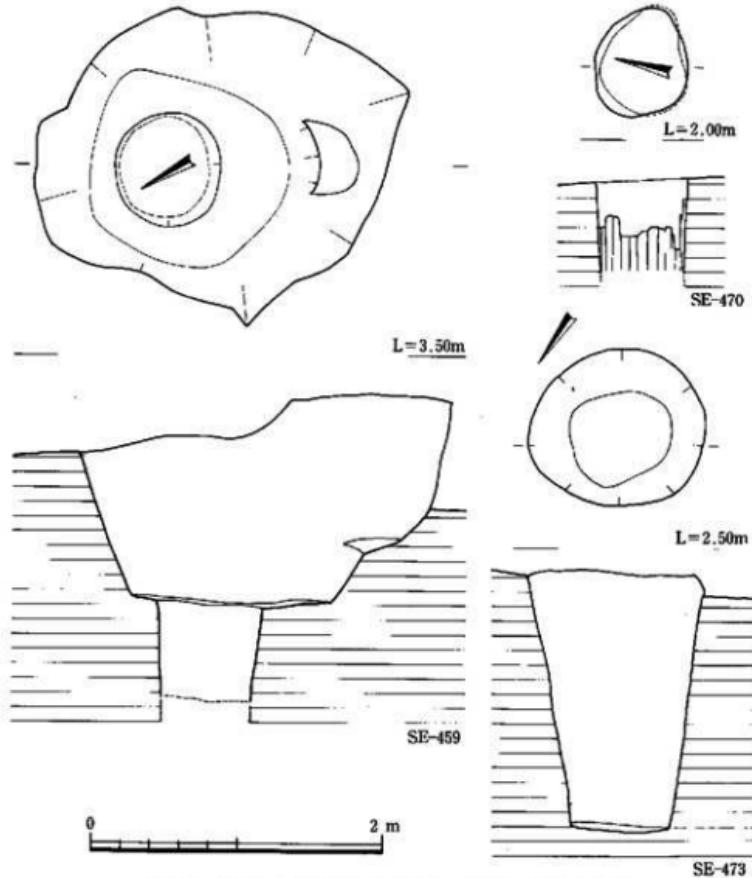
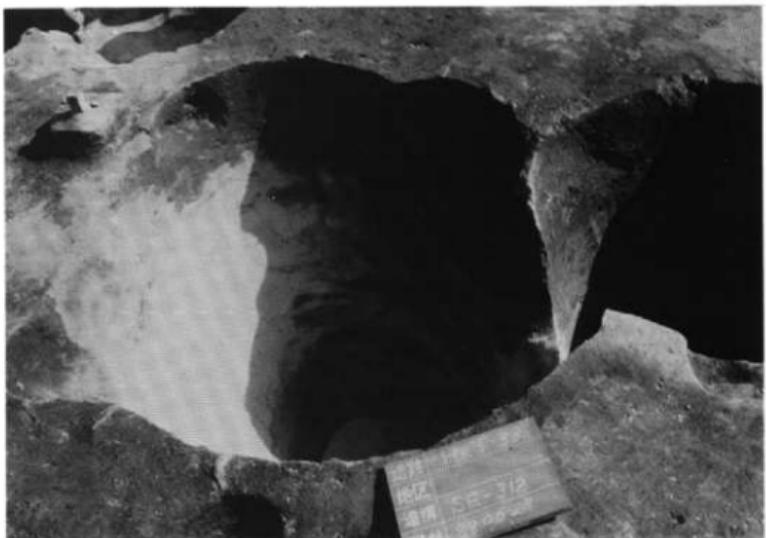


Fig.47 第459・470・473号井戸(SE-459・470・473)実測図



1) 第313号井戸

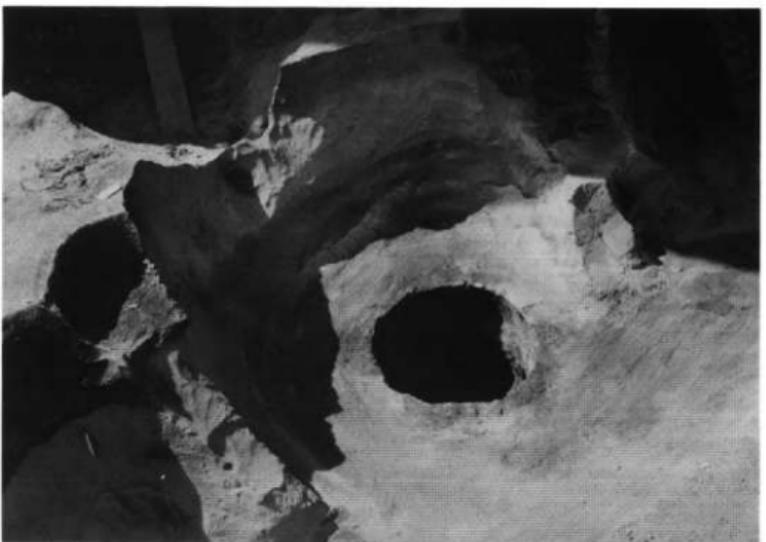


2) 第385号井戸

Fig.48 第312・385号井戸実掘状況



1) 第453号井戸



2) 第459号井戸

Fig.49 第453・459号井戸完掘状况

井筒は径90cmで、掘り方のほぼ中央部に位置している。井筒には幅5~7cm、長さ30cm前後、厚さ2mm前後のスギの板目取り材を用い、巡らして木枠としている。床面の標高は1m前後である。SE-459も第2面の遺構群に切られているが、2.5m前後の隅丸方形を呈する掘り方をもっていたと考えられる。井筒は径70cm前後で、掘り方の中央部から北東寄りに位置している。本井戸は湧水が激しく完掘できなかつたが、床面の標高は1m前後と考えられる。2基の井戸は井筒から少量の遺物が出土したのみであるが、13世紀前後と考えられる。

調査区の西南部ではSD-367から東側は井戸・土壙等が密集し、西側は柱穴が密集している。井戸が5基(SE-312・385・435・453・470)、土壙が31基(SK-363・400など)検出した。SE-312はSK-338・339を切り、第2面の遺構に切られている。1.8m前後の隅丸方形を呈する掘り方をもち、掘り方のほぼ中央部に径60cmの井筒がある。床面の標高は1.56mである。SE-385はSD-367に切られ、同溝の底面で検出した。検出面では径1.4mを測る円形の桶状をなす掘り方をもち、掘り方中央に径65cm、高さ13cm、厚さ1mmのスギの板目取り材を用いた曲物をえ、井筒としている。床面の標高1.3m前後である。SE-435もSD-367の底面検出で、SE-385・453の間に位置している。径60cm弱の井筒のみの検出で、井筒内には角礫が詰め込まれている。本井戸は湧水が激しく、完掘できなかつたが、底面の標高は1m前後と考えられる。SE-453もSD-367の底面で、径60cmの井筒のみを検出した。湧水が激しく完掘できなかつたが、底面の標高は1m前後と考えられる。SE-470もSD-367の底面検出で、SE-453の南に位置している。



Fig.50 第281号土壤完掘状況

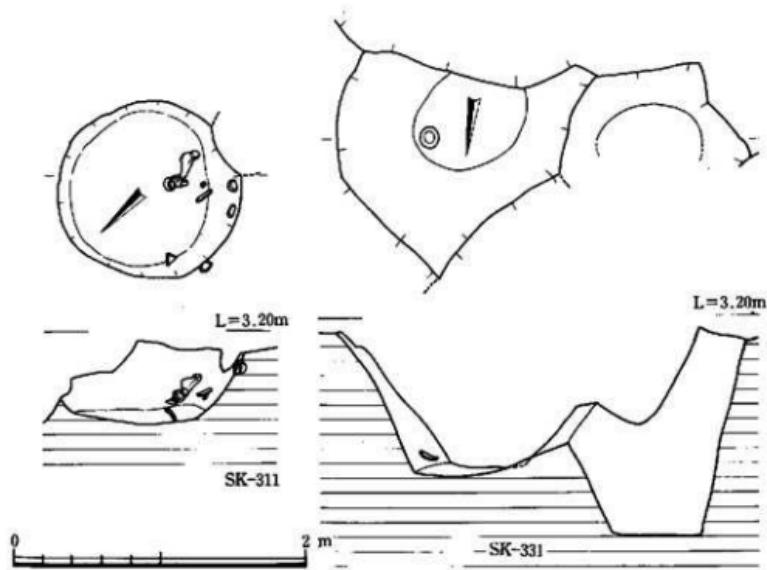
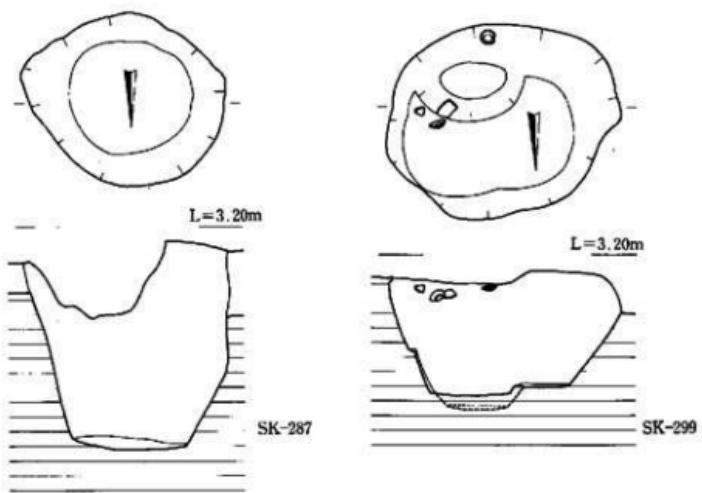


Fig.51 第287・299・311・331号土壤(SK-287・299・311・331)実測図

径65cmの井筒のみ遺存し、井筒には木枠が使用されている。底面の標高は1m前後である。これらの井戸は12世紀後半から13世紀のものである。土壇は隅丸方形を呈すると考えられるものの11基（SK-340・484など）、長方形を呈するもの1基（SK-426）、円形を呈するもの4基（SK-354など）と切り合いにより形状がわからないものなどがある。SK-313はSD-367に切られている。平面形は梢円形を呈し、長軸1.4m前後、短軸1m前後を測り、80cm前後遺存し、床面は皿状をなしている。SK-363は第2面の遺構に切られ、本来の形状はわからないが、検出面でみるとかぎり1.2m前後の隅丸方形を呈している。1.4m前後遺存し、床面は皿状をなしている。SK-340はSD-367に切られている。1.7m前後の隅丸方形を呈し、40cm前後遺存している。SK-426は平面形が長方形を呈し長軸1.5m、短軸0.6mを測り、40cm遺存し床面はほぼ平坦で土壤基底をなしている。これらの土壤は12世紀後半から13世紀のものが主体をなしているが、SD-367より東側には中世末頃のものもある。

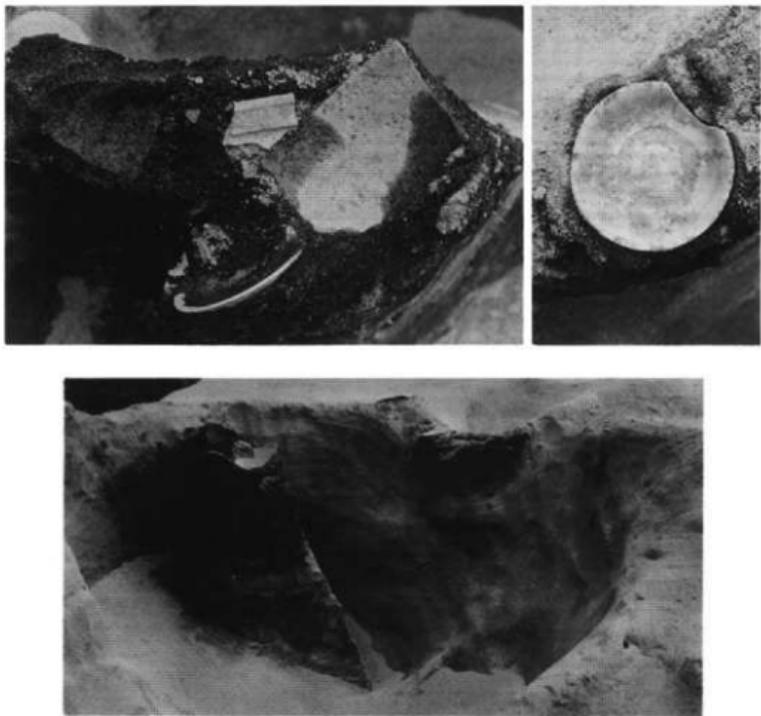


Fig.52 第299号土壤出土遺物状態

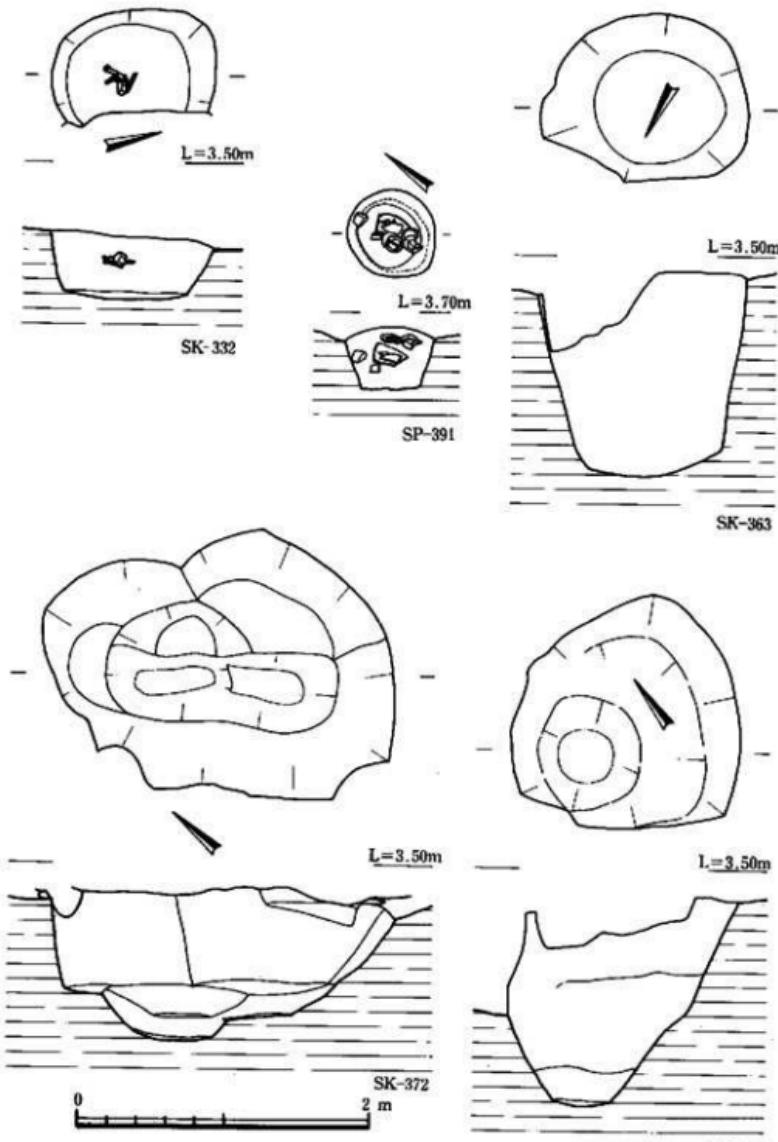


Fig.53 第332・363・372・409号土壤(SK-332・363・372・409)
および第391号柱穴(SP-391)実測図

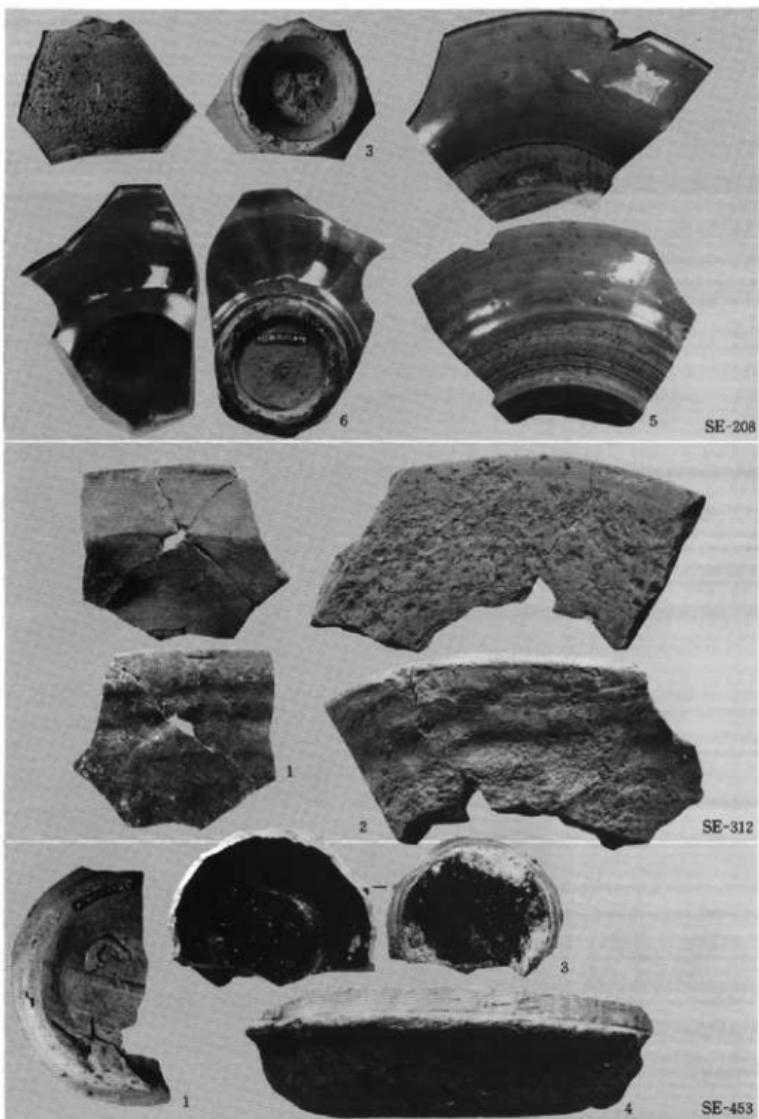


Fig.54 第208・312・453号井戸出土遺物

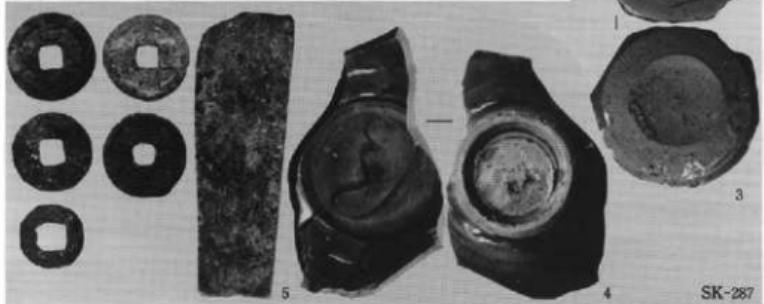


Fig.55 第283・287号土墳出土遺物

2) 第3面検出遺構出土遺物

SE-312 (Fig.54)

- 1は土鍋で、内面の調整はヨコナデ、外面は指頭痕による凹凸が多く、煤が付着している。
2は、径26.5cmの土師質の擂鉢で、卸し目はほとんど消えている。

SE-453 (Fig.54)

井筒内から検出したもので、1は口径12.5cm、底径9.6cm、高さ2.8cm、糸切りの土師器坏で底部に板状の圧痕がみられる。2は口径13.7cmの類似の土師器である。3は、黒茶色の釉薬がかけられた中国製瓶で、外底の釉の上に灰色砂の焼台痕が3ヶ所ついている。胎土は灰色の精製土で白い粒が多く混入している。4は口径29.4cmに復元できる滑石製石鍋で、欠損の下端面を磨いて2次的な転用をしている。鉢は短く、石質は光沢をもち、白く軟質である。

SK-283 (Fig.55・56)

1は白磁碗V類、2はIV類の通有品。3は口径16cmほどの壺で、うすく透明釉がかけられ黄色みをおび、内面は無釉で灰色の土をみせている。わずかに肥厚させる口縁の造りはしっかりとっている。4は滑石製の台状を呈する小形品で、台部に径0.7cmの孔を穿っている。高さは1.7cm。

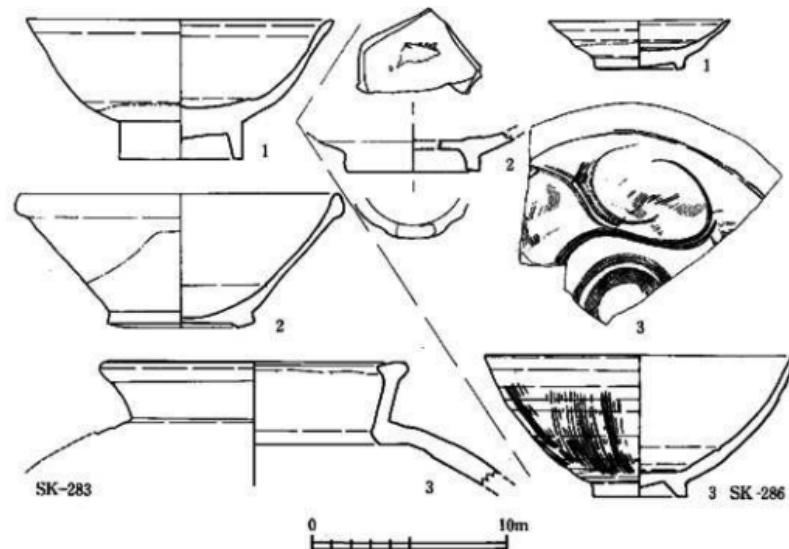


Fig.56 第283・286号土塚出土遺物実測図



Fig.57 第297・299号土壤出土遺物

SK-285 (Fig.29)

1は白磁の皿で、内面に油煙が付着、灯火皿として使用。外底は露胎で糸切り痕がみられ、釉はピンホールが多い。他に土師器糸切り皿が共伴する。

SK-286 (Fig.55・56)

糸切りの土師器皿、坏を含む土壤で、2の坏は灯火皿に使用されている。3は福建省同安窯系青磁皿、4は龙泉窑青磁碗であり、この外底部に径3.3cmのクッツキがみられる。5は砾石。銭貨は「元豐通宝」(1078)、「紹聖元宝」(1094)、「洪武通宝」(1368) および無名銭出土。

SK-297 (Fig.57)

1の土師器坏の法量は12.3cm—9.0cm—2.4cmをはかり、糸切り、板状压痕がついている。2は白磁IV類碗、3は白磁四耳壺の頸部で、口縁を鋭く折り返し、頸部に3本の沈線をいれる。

SK-299 (Fig.57・58)

糸切りで、大きめの土師器の組合せをみせる。1、2の皿の口径は9cm前後、坏の口径は15~16cm、3は内底に輪状に砂目跡を残す白磁皿、4は露胎の外底部に油煙が付着する。5は4と同じ器形で、内底の釉を輪状に搔きとるタイプ。6はV類の白磁碗で、見込みに鶴描き文、露胎

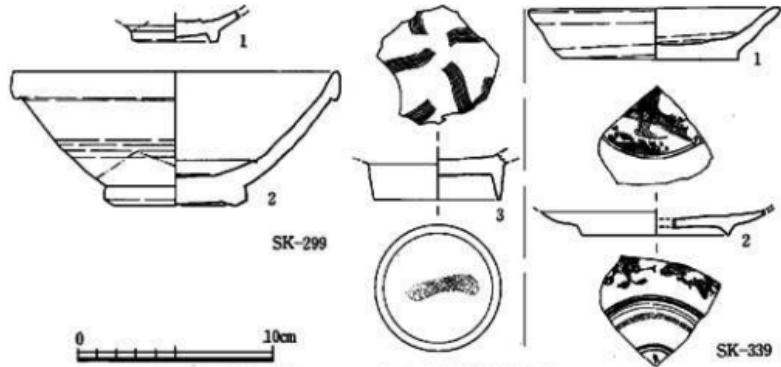


Fig.58 第299・339号土壌出土遺物実測図

の底部に墨書「一」、17は通有のIV類白磁碗、外面に窓跡が付着する。18は赤褐色を呈する陶器壺の底部。

SK-311 (Fig.59・60, Tab. 5)

1、2は瓦器碗である。1は漆黒色の器肌を内外面ともにみせ、外面は斜め方向にミガキ痕が高台近くまであり、口縁はかるく凹ませている。内面にも幅広のミガキがみられる。高台

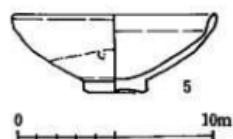


Fig.59 出土遺物実測図

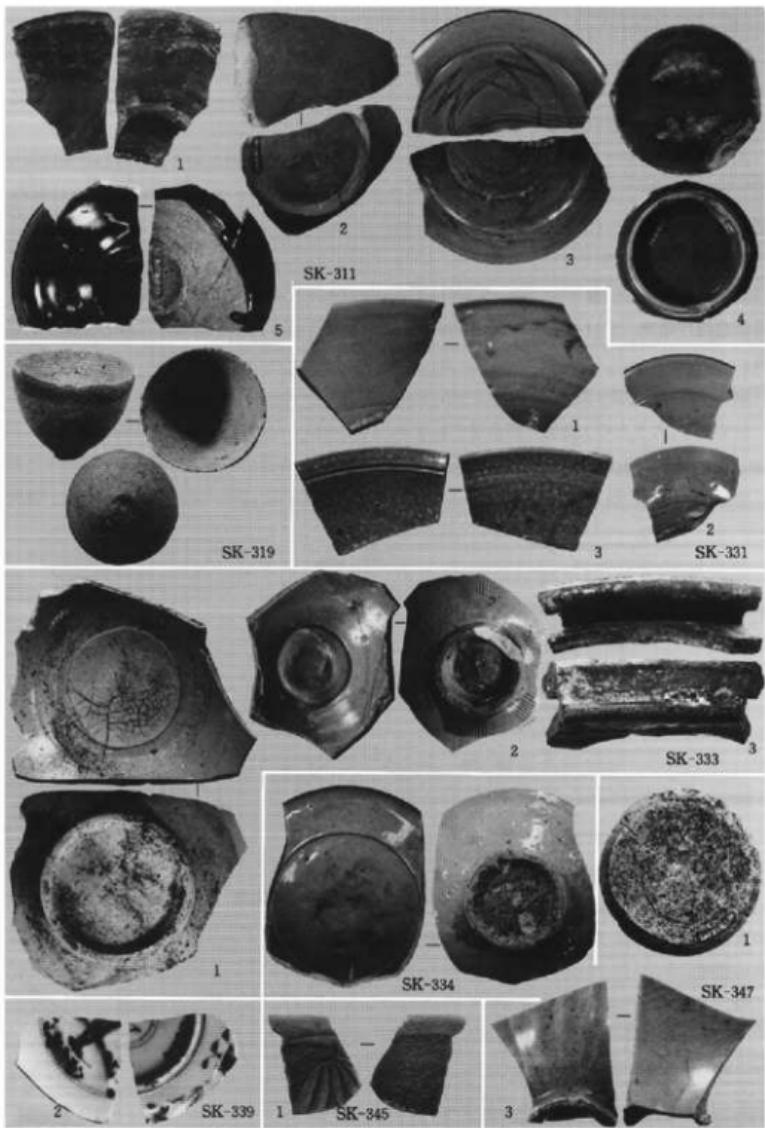


Fig.60 第311·319·331·333·334·339·345·347号土墳出土遺物

は内彎する形である。2の底部破片は、内底に弧線の暗文がみられ、高台は断面三角形で矮小化しており、柿葉型II期のものであろう。3は同安窯系青磁皿、4は双魚文貼付けの竜泉窯青磁碗で、黄緑色の釉が厚くかけられ、疊付きを除く純釉である。氷裂文もみられ、胎土も灰色でかつ精製均質である。5は黒釉碗で、10.6cm—3.2cm—4.0cmと小形である。口縁を内彎させる形をとり、高台はきっちりと削り出す。茶色の化粧釉のうえに黒釉をかけ、外面の中位以下は露胎である。胎土は表面が黄褐色、内部は灰色である。竜泉窯製の黒釉碗のなかに類品がある。6は土師器の丸底の坏で、口径15.4cm、7は糸切り皿で、8は口縁を外反するタイプのヘラ切り小皿である。

SK-319 (Fig.60)

焼き縮めの盃形品で、口径5.3cm、高さ4.5cmをはかり、尖底状を呈する。全体は黄褐色で粒子の粗い胎土をみせ、口縁の外側に幅1cmぐらいの赤色の帯状の顔料がぬられている。俗にソラギュウ形の盃に似ている。

SK-331 (Fig.60)

1は白磁碗V類、2は同安窯系青磁皿である。3は口径15.8cmの青磁碗で、薄く透明な灰釉がかけられ、口縁内側に幅3ミリの沈線をめぐらす特徴がある。

SK-333 (Fig.60)

1は白磁碗で、内底を輪状露胎にするタイプで高台径は6.7cmをはかる。2は同安窯系青磁碗であり、縁ではなく青色釉がかかる。高台の削りは粗雑である。3は壺の口縁であり、雜釉がかけられているが、2次的の焼成により融解している。

SK-334 (Fig.60)

白磁皿で、口径11.2cm、底径4.4cm、高さ2.9cmをはかる。少し青みを帯びた透明釉がかけられ、高台は露胎。青白磁の瓜形合子の小形品が共伴している。

SK-337 (Fig.61, Tab. 6)

底部に板状の圧痕をもたない土師器と、芒口白磁皿が共伴する時期の遺物の組成である。1、2の土師器皿の法量はほぼ同じで、8.0cm—6.0cm—1.2cmをはかり、内底の中心も

Tab. 5 第311号土壤出土土師器計測表

No.	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
6	坏	15.0	—	3.2	ヘラ	○	
7	坏	11.0	9.4	2.2	○	不明	
8	皿	9.8	7.4	1.4	ヘラ	○	

Tab. 6 第337号土壤出土土師器計測表

No.	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	8.0	6.0	1.2	○	ナシ	
2	皿	7.8	6.0	1.2	○	ナシ	
3	坏	11.9	8.0	2.4	○	ナシ	

ヨコナデである。3の坏は11.8cm—8.1cm—2.6cm、調整は皿と同じであり、いずれも回転糸切りで、焼成はよい。4は瓦質の鉢であり、口縁を折り返して肥厚させ、内側には溝がめぐる。

5は芒口白磁皿で、外底は施釉されており、口縁には油煙がついている。6は青磁鏡文碗であり、口径は10.0cmと小形で、釉は暗青色に発色し厚めにかけられ、細かい氷裂文が入る。

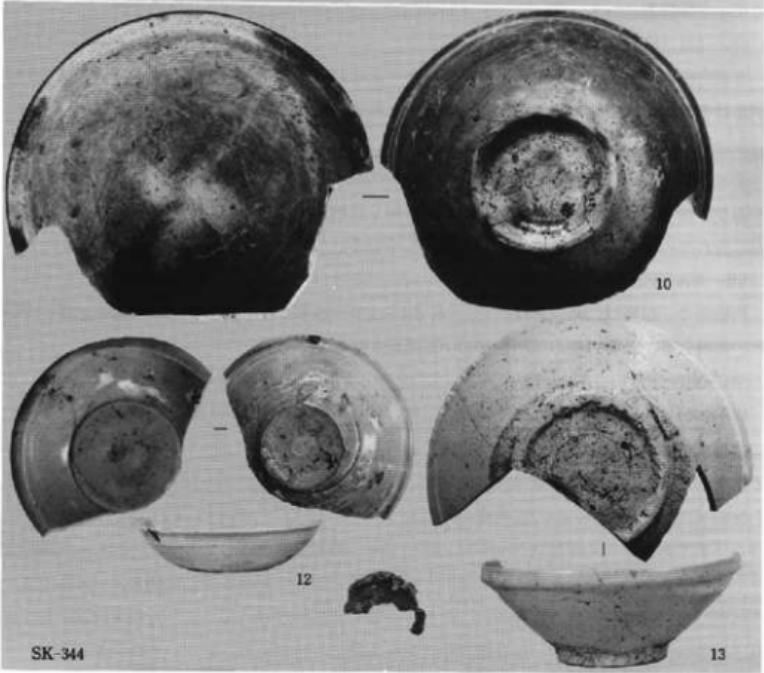
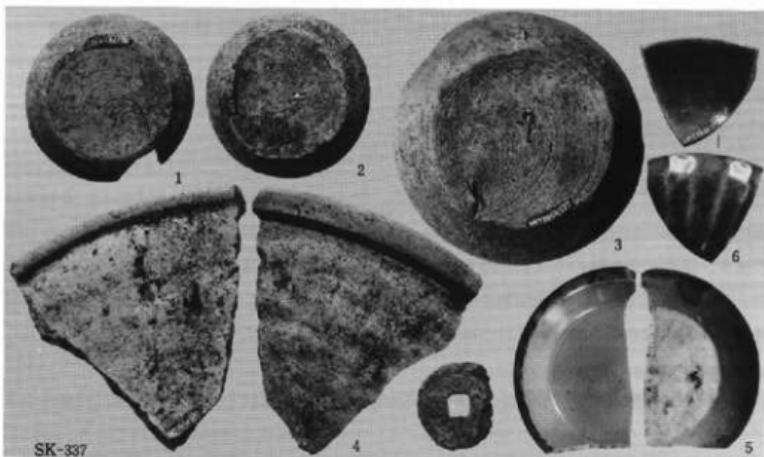


Fig.61 第337·344号土壤出土遺物

SK-339 (Fig.58・60)

1は板状圧痕をもつ糸切り土師器坏、内底を強くナデ調整している。2は青花皿で、見込みに人物文、外周に牡丹唐草文、底中央の2重圓内に「天下泰平」の銘を記す。

SK-344 (Fig.61・62)

土師器皿・丸底坏・椀、瓦器椀、白磁皿・碗をまとめて検出した。土師器破片は205片を数え、そのうち底部のヘラ切離しのものが201片、糸切り放しのものは4片ときわめて少數である。検出遺物中に、明代青花皿1片もあるので、これらの糸切り土師器も近接遺構からの混入品の可能性があり、したがってここからの土師器はヘラ切りを主体とすると考えられよう。

土師器皿には、形態としては1のように体部を直線的にのばすものと、2のように体部を反転して、外反の形にするものがあり、3の体部はわずかに外反させている。調整はヨコナデで、ヘラミガキは認められず、内底中央付近はナデ、外底には板状圧痕がみられる。2には、外底に約6ミリ間隔でコテ状の傷が数本あり、赤褐色を呈する。1と3は褐色である。口径は8.8~9.2cmである。

土師器の丸底坏4~9においては、7~9のように口縁を強く押さえて体部から反転して外反する形にするものと、ほぼ直線的に体部をのばす4~6に分けられる。口径は14.8~15.7cmの内にはいり、高さは3.5cmであり、ほぼ規格化されたサイズである。仕上げについてみると、内面はミガキ調整され、5ではいわゆるコテが図の右から当たり、内底の中央までミガキが認められる。6も同様であり、外面口縁部はヨコナデ、底部は一部にナデがあるが、未調整で、5には薄状圧痕が認められる。7以下の内面も全体にミガキがあるが、口縁付近の外反に伴う凹部はヨコナデの下地調整がみられる。7ではコテ痕が明瞭にみられ、焼成も堅い。9は内面全体に油煙が付着しているが、ほぼ完形品であり、外面の調整はナデが部分的にみられるが、全体として凹凸の多い未調整である。これらに対して、4のみはミガキが認められず、淡い褐色の胎土に、口縁内外はヨコナデ、内底はナデ、外底にも指頭痕がつよく残りナデ調整である。

10は椀形の土師器であり、15.7cm~6.0cm~5.4cm~5.9cmの法量をもち、口縁を外反し、その内側には稜をみせ、丸みをもつ体部にわずかに外に短く張った高台を貼付している。口縁内外はヨコナデ、それ以下の内外面はミガキが施されているが、丁寧ではなく、凹部にはヨコナデが残る。内面は比較的密にミガキがされている。高台付近はヨコナデ、外底はナデ調整され、茶褐色ないし黒褐色を呈し、硬質である。

11は瓦器椀で、口径16.0cmに復元できるが、底部は欠損している。色調は、一部に黒灰色がみられるが、全体はわずかに灰色を帯びた淡い褐色であり、通常の瓦器椀とは異なる。口縁の内側に1本の沈線をめぐらしているがやや雑である。それ以下は、1ミリほどの幅のミガキ線が横位に非常に密に施されている。内底にも波状のミガキ線がみられる。それに比べて外面のミガキは粗雑で、指頭により凹凸の多い器面に、横位ないし弧線状にやや幅ひろのミガキ痕が

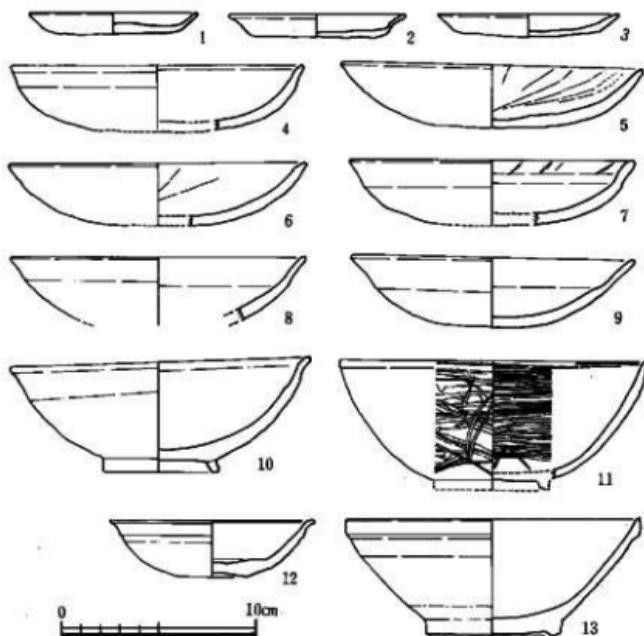


Fig.62 第344号土壤出土遺物実測図

みられ、高台上のヨコナデまで続いている。いわゆる楠葉型瓦器椀のⅠ期の後半のものに類似している部分がおおいが、その製品とすることは躊躇され、類例の出土をまちたい。図示したほかに瓦器椀は3片あり、11と類似しているが内外ともに灰色を呈するもの、底部破片で楠葉型のもの、および口縁内側に沈線をめぐらきないものがある。中国陶磁器では、12は口径10.6cm、高さ2.9cmの白磁皿である。口縁を水平に折り上げ、口縁下に隆線をめぐらし、底部はあげ底状に削り出して露胎のままとする。透明な淡緑色釉が薄くかけられ、外底の釉際は赤変している。内底のいわゆる鏡は体部側に凹線を入れている。このタイプの類品はあるが、本品はそれらに比較して法量が大きく、腰が張り、より早い型式である。13はIV類の白磁碗であるが、15.0cm—6.5cm—6.0cmとやや小振りであり、口縁肥厚部、いわゆる玉縁幅1.0cm、同最大厚さ0.7cm、高台高0.7cmと、後に肥大化する部分が小さい。内面に鏡はなく、釉はピンホールの多い白灰色半透明であり、高台脇以下は露胎のままである。図示していないが類似の碗と皿各1片のいずれも白磁のみを検出した。ほかに須恵器坏で、碁笥底状に高台を貼付した破片1、不明鐵1枚、これらがこの土壤から検出できたすべてである。

以上のように、これらの遺物は11世紀後半から12世紀初めの間の良好なセットといえよう。隣接する第43次調査のSK-228、312、316、318、341などと同一時期と考えられる。(『博多18・博多遺跡群第48次発掘調査報告』1991)。

SK-345 (Fig.60)

1は竜泉窯青磁碗で、内面に蓮華文を唐草状に配する施文である。これと共に土師器はヘラ切りのもので、表示した2は丸底壺であり、口縁下を強く押さえて外反させ、内面にも溝をつくる。3の皿は口縁内側に線が入るもので、外底は指頭による凹凸がみられる。4は高台付きの椀である。検出遺物数が少ないのが難点であるが、竜泉窯青磁の出土例としては早い時期に位置づけられる可能性がある。

SK-347 (Fig.60, Tab. 7)

SK-337に近い時期と見られる。1、2の土師器(表示)はいずれも板状圧痕のない糸切り底であり、これと共に3の青磁碗は鑄文、総釉であり、疊付のみ鉄足となっている。釉色は灰青色、釉が厚く、細かく氷裂文が入っている。1300年前後の年代が推定できる。

SK-361 (Fig.64)

瓦質の擂鉢を検出した。外面は灰色、内面は灰黒色を呈する。内面には4本の擂目があり、地はハケ目調整である。外面は凹凸がおおいが一応ナデ調整がなされている。錢貨3枚を検出したが鈎化が著しい。

SK-363 (Fig.63・64)

竜泉窯青磁刻花文の外底部に「六」の墨書きがみとめられる。内底の片切形りは花文の便化である。

Tab. 7 第347号土壌出土土師器計測表

No.	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	7.7	6.5	1.0	○	ナシ	
2	壺	12.0	8.5	2.5	○	ナシ	

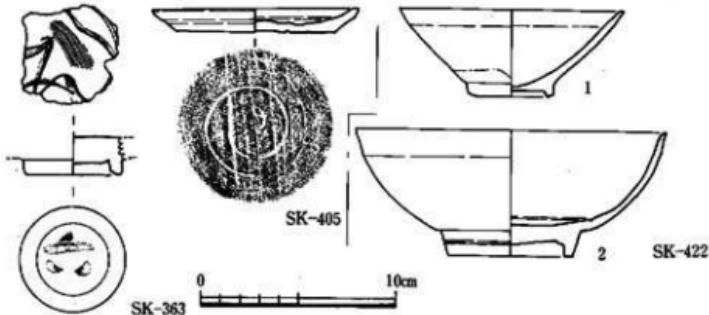


Fig.63 第363・405・422号土壌出土遺物実測図

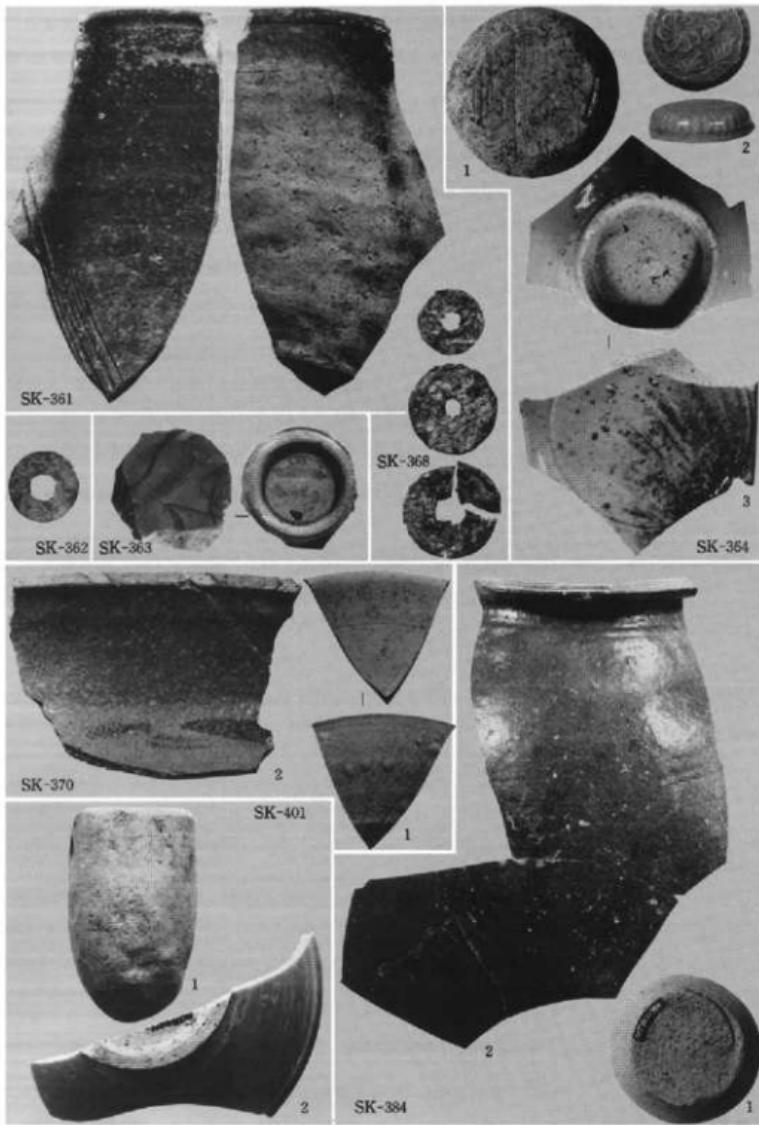


Fig.64 第361~364・368・370・384・401号土壤出土遺物

SK-364 (Fig.64, Tab. 8)

土師器は右の計測表のとおりで、いずれも糸切り、板状圧痕を底部にこす。2は合子蓋であるが、胎土が灰色に近いため透明釉が緑色を帯びて呈発し、青磁色となっている。

天井部の草花文、側面の菊花文および施釉方法など青白磁の技法である。3は通有の白磁V類であるが、内底の釉下の一部が墨流し状の黒色を呈する。

SK-370 (Fig.64)

- 1は白磁V類で、外面に櫛目文をつけるタイプ、クリーム色の半透明釉がかけられている。
- 2は黄釉鉄絵盤の通有品で、玉縁状の口縁部にほぼ5cmおきに目痕をついている。

SK-374 (Fig.65, Tab. 9)

土師器、白磁、青磁がまとめて検出できた。土師器は別表に示すように、1点のヘラ切り底を除いて糸切りで、板状圧痕をもっている。さらに壺の口径は平均で15.9cmと比較的大きい。皿はわずか2点であるがこれも大きく、12世紀中葉から後半期の土師器の法量に該当する。

7は白磁器で、内底にヘラ刻みの花文を入れ、外底の輪胎をのぞき半透明釉がかかるが、油煙がかなり付着しており、灯火具としての使用が想定される。8は器肉の薄い白磁碗で、内面にヘラとクシにより花文を刻む。釉は光沢のある透明で、わずかに青みを帯び、水裂がある。9は灰白、11は黄白色を呈する白磁V類碗である。10は、内面にクシにより蕉葉文を入れる白磁碗で、わずかに青味がかかる透明釉が高台脇までかかり、高台は直立している。広東省潮州筆架山窯にこのデザインの白磁がある。12は青磁小皿で水裂の多い透明釉がかなり厚くかけられている。12世紀後半期の標準的な遺物組成である。

SK-384 (Fig.64)

2は、T字型口縁の大甕で、暗黄緑の釉が内外にかけられており、内面には同心円文の受け具痕がみられる。口縁の上面は釉が剥ぎ取られている。胎土は暗赤色。共伴の1の土師器皿は、7.2cm-5.4cm-1.3cmの法量の糸切り底である。

SK-401 (Fig.64)

1は古墳時代の婧壺で、口径6.0cmと小形である。褐色を呈し、内底は黒色である。2は白磁碗IV類で、口径16.4cm、底径6.3cm、高さ9cmをはかり、口縁肥厚部幅0.8cm、同最大厚さ0.6cm、

Tab. 8 第364号土壤出土土師器計測表

No	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	8.0	6.0	1.6	○	○	
4	皿	9.4	7.0	1.5	○	○	
5	皿	8.4	7.4	0.9	○	不明	

Tab. 9 第374号土壤出土土師器計測表

No	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	9.2	6.9	0.93	○		
2	壺	14.9	10.0	2.5	○	○	
3	壺	16.2	10.5	2.9	○	○	
4	壺	15.7	12.0	2.75	○	○	
5	壺	15.5	10.5	3.2	○		
6	壺	15.0	10.0	3.0	○	○	
14	壺	17.0	10.6	2.9	○	○	
15	壺	17.8	—	3.5	ヘラ	○	
16	壺	16.8	12.4	2.65	○	○	
17	壺	15.2	9.0	2.4	○	○	
18	壺	16.4	11.8	2.6	○	○	
19	壺	15.5	11.2	2.5	○	○	
20	壺	14.8	9.6	2.75	○	○	
21	壺	14.6	10.8	2.5	○	不明	
22	皿	10.0	8.0	1.1	○	ナシ	

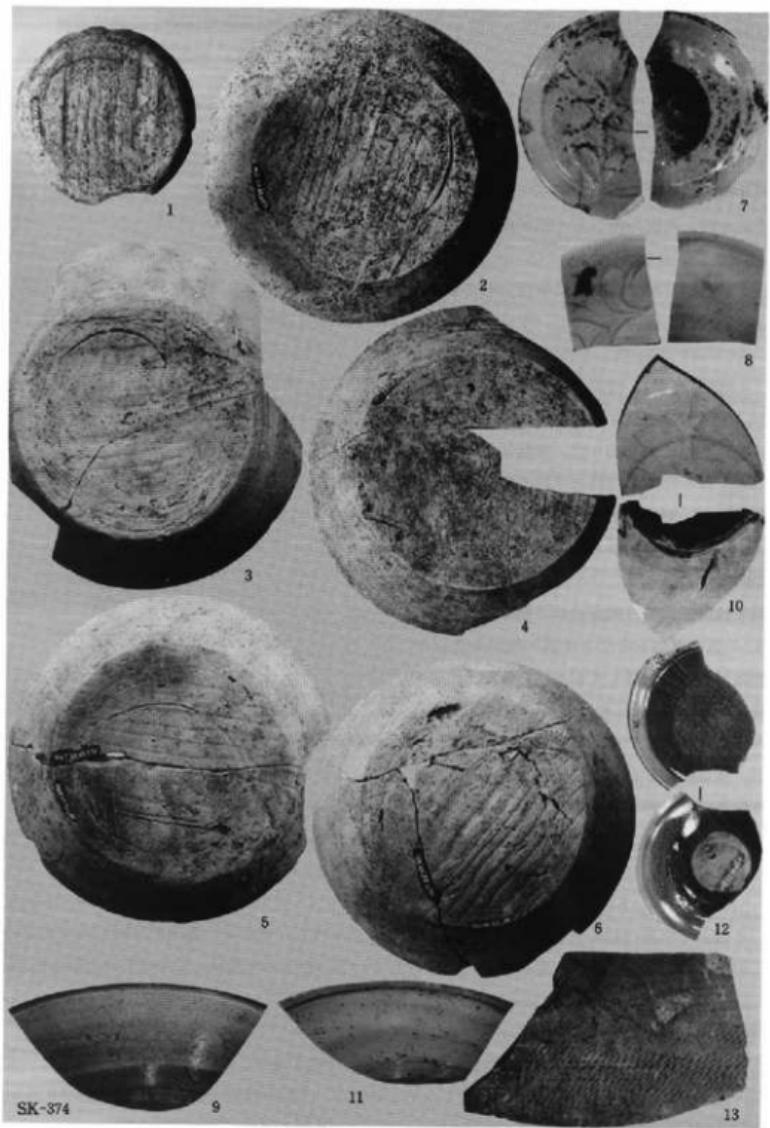


Fig.65 第374号土壤出土遗物

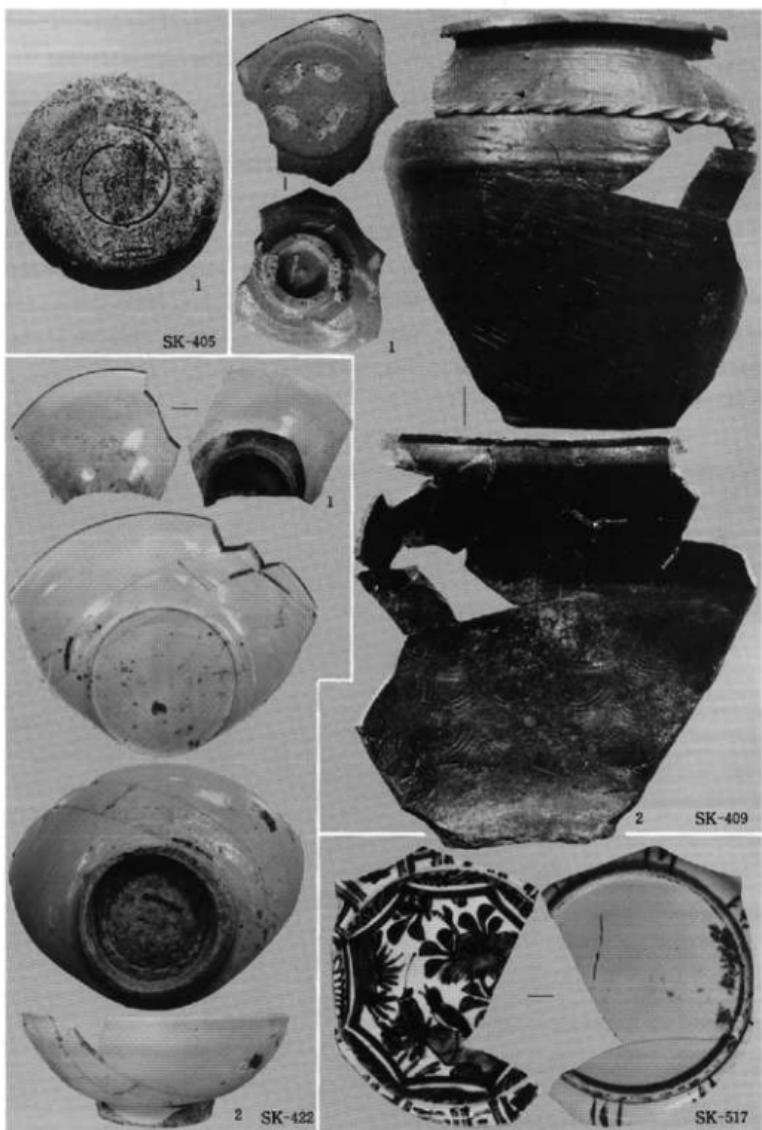


Fig.66 第405・409・422・517号土壤出土遺物

高台の高さ0.7cmである。内底に圓線を入れないタイプであり、SK-344の13に似ている。

SK-405 (Fig.63・66, Tab.10)

Tab.10 第405号土壤出土土器計測表

粘土紐の巻き上げ痕を、ヘラを用いて逆時計回りに追刻しており、その刻線が明瞭にみられる。ヘラ切り、法量は10.3cm—8.1cm—1.2cmと大きい土器皿である。

SK-409 (Fig.66)

1は朝鮮雜釉皿で、高台径3.9cm、疊付を含めた總釉で、青灰色となり、疊付と内底に各4個の砂目がついている。2は茶釉壺で、口径23.0cm、高さ21.2cmをはかる。L字形に折りまげられた口縁の上面は釉がふき取られている。胴中位に低い突帯をめぐらし、頸部には繩目文の突帯を貼付する。外面に条痕文の叩打痕が、内面には同心円文の受具痕がつき施釉されている。外底のみ無釉で、焼成時の小石が固着している。唐津窯製品である。

SK-422 (Fig.63・66)

1は白磁の小碗で、径1cmほどの内底中央の円圈から体部を直線的にのばす。釉は透明で、青



Fig.67 第468号土壤出土遺物

色をおび下半までかけられている。口径12.0cm、底径4.3cmと小形品。2は、純白に発する透明釉がかけられた碗で、無軸の高台は三日月形に削られ、腰の張った形で、口縁を軽く反転させている。16.0cm—6.4cm—7.4cmの法量である。

SK-468 (Fig.67)

1は伊万里染付で、外面は雲竜文で、郭線内に濃み塗りしている。内面は余白をとった内に便化した魚を配する。外面にクツキがある。類品は有田長吉谷窯から万治3年銘(1660)碗が出土している。2は青味を帯びた地に薄い呉須で風景が描かれている伊万里染付碗である。疊付に砂が付着。3は型物の牛で、上に人物の手がわずかに遺存する。白磁土に純白の釉が脚を除いてかけられている。4は唐津鉄絵皿で、その法量は、14.5cm—4.8cm—3.1cm、内面に鉄絵線文、淡い緑色の釉がかけられ砂目がついている。高台を中心にして露胎とし赤味のある胎土である。5は口縁に茶色の釉をかけた小形鉢。茶色の胎土で、腰付近は削り仕上げし、やや高い高台を一気に抉り出して割り高台をしている。内底に黄色の粉状物が付着する。6は銅製雁首の破損品。17世紀後半の土壤である。

SP-300 (Fig.68・69)

白磁玉縁碗であり、内底を輪状露胎にけずりとするタイプであるが、口縁の肥厚が小さく幅0.6cm、厚さ0.4cmにすぎない。輪状露胎面に砂目がつき、疊付は擦られている。釉は半透明で白く、胎土も白磁質である。

SP-308 (Fig.69)

1は底径3.3cm小形の青白磁碗で、内ぐりの浅い高台は露胎で、黒変している。内底の釉下に列点文が二重にみられる。2は、V類の白磁碗であるが、焼成が悪く少し赤変している。

SP-391 (Fig.68・69)

糸切り土師器坏が4点出土し、体部との境が明瞭である。口径11.4～11.8cmである。

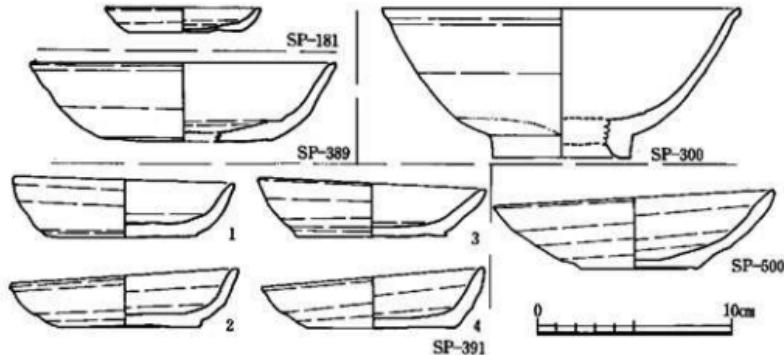


Fig.68 各柱穴出土遺物実測図



Fig.69 柱穴、第85号埋葬土壤出土遗物

3) 溝状遺構と出土遺物

本調査では第2・3面で5条の溝（SD-240・266・336・367・403）を検出した。SD-240は調査区の東側に位置し、第1・2面の遺構群に切られ遺存状態は悪いが、比較的まとまった遺物が出土した。SD-266は調査区の西側に位置し、N-31.5°Wの方位をとり横断面形は逆台形を呈し、黒灰色・茶褐色～茶灰色の粘質土・シルト・砂を覆土とし、西壁に沿って拳大の礫が流れ込んだ状態で検出された。SD-266はSD-367の最終の状態と考えられる。SD-367は幅2.7mで1.5m前後遺存している。横断面形は逆台形状をなし、N-37.5°Wの方位をもっている。SD-335・336は調査区の東側で4.5mの間隔をもち並走している幅1.2m前後で、50cm前後遺存し横断面形は逆台形を呈している。N-37.5°Wの方位をとり、道路の側溝と考えられる。SD-266・335・336は出土遺物から14世紀から16世紀のものと考えられる。

SD-240出土遺物 (Fig.70~72, Tab.11)

土師器、近世陶器、白磁、青磁、瓦、石製品などを検出した。土師器は別表のとおりで、すべて糸切りでかつ底部に板状压痕をもたない。皿はいずれも小形であり、口径において7.7～8.3cmの間が多い。23と24は内底に筒状部をつける灯火皿である。25は土師質の整形品で、小形の外耳に2個の穿孔がみられる。26は鉢形、内面は斜め方向に粗いケズリ、外面は縦方向のハケ目調整で、土師器としては硬質である。復元口径は40cmをこえる大形である。28～33は近世の肥前陶器で、唐津窯のものを主とする。34はIV類の白磁、35は竜泉窯青磁碗で、胎土がかなり暗いため釉は暗緑色を呈し、内面の蓮弁文はヘラと細かいクシにより施文されている。27は紡錘車形の土製品で、径5.8cm、厚さ2.3cm、重量92gを測り、中央に1孔を穿ち石臼の刻線文を表現している。手づくねで周縁は正円ではなく、黒みをおびた焼成である。36は桐花文の軒先丸瓦、37の平瓦は、宝珠形の中心飾りから左右に唐草文を3回転させる。左右の復元幅は約21cm、上下厚みは3.4cm、曲線頃で灰黒色を呈し、一部に銀化がみられ硬質である。この軒先瓦の

Tab.11 第240号溝出土土師器計測表

No	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状压痕	その他	No	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状压痕	その他
1	皿	7.6	5.9	1.1	○	ナシ	底部穿孔	13	皿	8.2	5.7	1.7	○	ナシ	
2	皿	7.7	6.0	1.1	○	ナシ		14	皿	7.8	6.2	1.3	○	ナシ	
3	皿	7.8	6.1	1.1	○	ナシ		15	皿	8.0	5.5	1.3	○	ナシ	
4	皿	7.9	6.5	1.4	○	ナシ		16	皿	7.8	6.0	1.1	○	ナシ	
5	皿	8.0	6.4	1.4	○	ナシ		17	皿	8.1	5.6	1.1	○	ナシ	
6	皿	8.3	6.1	1.2	○	ナシ		18	皿	6.3	4.8	1.3	○	ナシ	
7	皿	8.0	5.5	1.7	○	ナシ		19	皿	7.8	5.3	1.3	○	ナシ	
8	皿	8.1	6.3	1.3	○	ナシ		20	皿	6.1	4.8	1.0	○	ナシ	
9	皿	8.3	6.5	1.4	○	ナシ		21	皿	8.2	5.7	1.5	○	ナシ	
10	皿	9.2	7.6	1.2	○	ナシ		22	皿	9.6	6.9	2.2	○	ナシ	
11	皿	6.2	5.0	0.8	○	ナシ		23	窓口	7.9	5.9	2.6	○	ナシ	
12	皿	5.7	4.2	1.2	○	ナシ		24	窓口	8.3	6.1	3.1	○	ナシ	



Fig.70 第240号溝出土遺物（1）

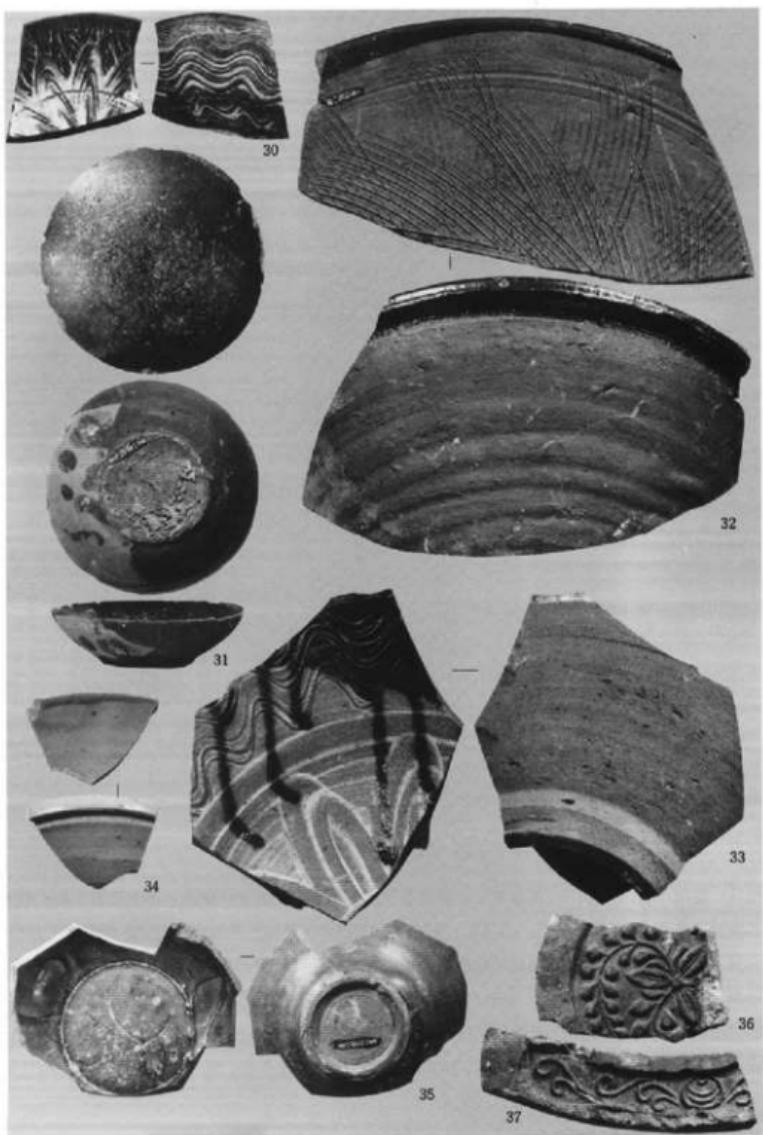


Fig.71 第240号溝出土遺物（2）

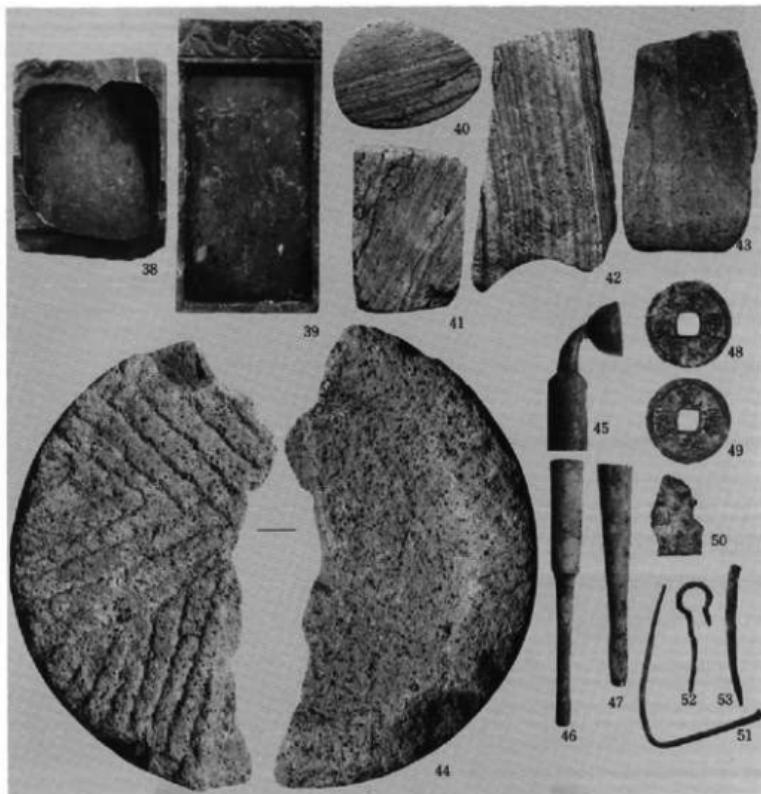


Fig.72 第240号溝出土遺物（3）

類品に福岡市有田・小田部遺跡第19次調査2号溝の出土品がある（『有田・小田部第4集』福岡市教育委員会 1983）。また、1583年（天正16）築城の福岡市名島城出土瓦にも類似しており、おおよそ16世紀と考える。38は灰色頁岩の石硯で、裏面に針書の文字があるが判然としない。39の石硯は小豆色の頁岩で、上辺に岩礁と波濤の雅拙な彫刻があり、裏面には針書きの文字と略描画がみられるが判然としない。40～43の砥石の石質は通称天草石で、縞状の流文がみられ、近世に多い用材である。44は石臼で、径30cm、厚さ9cmをはかる。45～47は煙管、48、49は「寛永通宝」、50～53は銅線、金具などである。

SD-266出土遺物 (Fig.74・75)

L=3.70m

1～3は土瓶器、1の小皿の口径は6.7cm、2、3の壺はほぼ同大で、2の口径は9.2cmをはかり、いずれも系切り。4、5は瓦質火鉢で、口縁に同心円印花文をめぐらしている。6は薄い緑色の透明釉がかけられているが白磁碗V類である。7は竜泉窯青磁香炉で、淡い緑色を呈する釉であり、透明度が高く光沢がある。口作りはシャープで、貼り付けられた牡丹唐草文の一部が残る。8は青磁盤で、豆青色の釉がかけられ、外底中央は露胎で赤変している。内底に花文の印花文がみられる。9は土鍤で長さ4.5cm、暗赤色を呈し、かなり高い温度で焼成されている。10は採り鉗。

線。

SD-367出土遺物 (Fig.75)

1は白磁碗IV類、2は福建省同安窯系青磁碗、外底は兜巾状の削りで、標目は太い。

SD-403出土遺物 (Fig.75)

1は滑石製の菊花文スタンプで、印面の大きさは5.1×4.2cm、ただし茎の下端の切り方が不自然であるので本来は下方に続いていた可能性もある。2は白磁碗IV類で、この共伴関係ならば1は鎌倉期のものである。

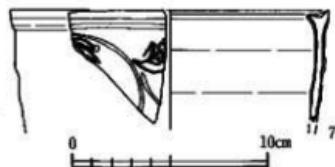
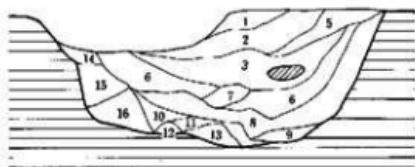
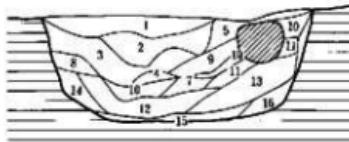


Fig.74 出土遺物実測図



L=3.70m

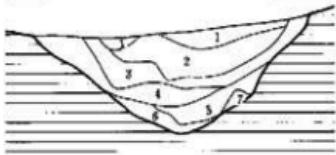


- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 黒紫色砂質土 (少しだけを含む) | 9. 黒紫色砂質土 (やや細粒) |
| 2. 黄褐色砂質土 (少しだけを含む) | 10. 黄褐色砂質土 (やや粗粒) |
| 3. 灰色砂質土 (少しだけを含む) | 11. 灰色砂質土 (やや粗粒) |
| 4. 灰褐色を帯びた名物土 (多量に砂) | 12. 灰褐色を帯びた名物土 (やや粗粒) |
| 5. 黑紫色砂質土をさむ黒褐色砂質土 | 13. 黑褐色砂質土 (やや粗粒) |
| 6. 黑褐色砂質土 | 14. 黑褐色砂質土 (やや細粒) |
| 7. 黑褐色砂質土 | 15. 黑褐色砂質土 (やや細粒) |
| 8. 黑褐色砂質土 | 16. 黑褐色砂質土 (やや細粒) |

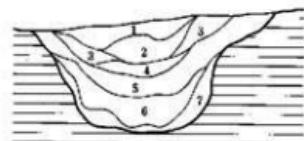
SD-266

SD-336

L=3.500m



L=3.50m



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 青黒色砂質土 | 4. 黒紫色砂質土、一部褐黃色砂質土 |
| 2. 實相灰褐色砂質土に系褐色砂質土 | 5. 茶褐色砂質土 |
| 3. 黑褐色砂質土 | 6. 明褐色砂質土 |
| | 7. 黑褐色砂質土 |

0 1 m

第266+336号溝(SD-266+336)
土層断面図

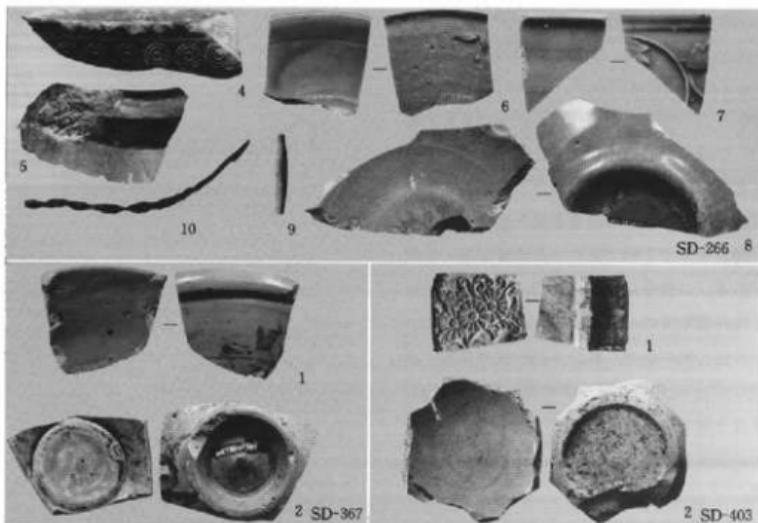


Fig.75 第266·367·403号溝出土遺物

1 of 3 2020

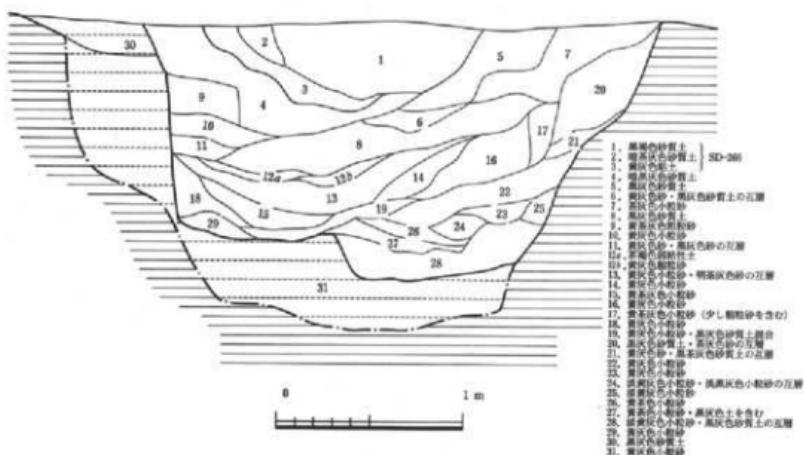


Fig.76 第367号溝 (SD-367) 土層断面図 (南より)



Fig.77 第3面検出時出土遺物

4) 第3面検出時出土遺物 (Fig.40・77、Tab. 12)

土師器は別表のようすべて糸切りで、底部に板状の圧痕をもたない。12は器高の高いものであり、一応壊したが輪轆回転の状態と焼成からみてきわめて新しいものとみる。皿の8もこれに類似する。13は備前窯のすり鉢で、立ち上った口縁帯に2本の沈線をめぐらし、内面は輪轆の凹凸が著しく卸し目は継と斜めの組合せである。14は土師質の擂鉢で、褐色、外面に凹凸が多い。15は天目釉の小碗で、口径10.0cm、底径3.1cm、高さ4.1cmをはかる。灰色の胎土に茶色の化粧掛けをし、光沢のある黒釉をかけている。中国製。16は、内面に櫛により施文された白磁碗で、釉は少し薄緑を帶びている。17の白磁碗の底部に墨書きがみられ、「安光」であろうか。18は8世紀代の須恵器の完形品、高台は低く幅広である。19は土製の円盤で、径3.7cm、厚さ1.4cm。

Tab.12 第3面検出時出土土師器計測表

No.	器形	口径	底径	高さ	糸切り	板状圧痕	その他
1	皿	7.3	6.1	1.0	○	ナシ	
2	皿	7.1	5.1	1.4	○	ナシ	
3	皿	8.3	7.2	0.9	○	ナシ	
4	皿	7.7	5.8	1.3	○	ナシ	
5	皿	8.3	6.4	1.3	○	ナシ	
6	皿	8.8	6.0	1.8	○	ナシ	
7	皿	8.4	6.2	1.5	○	ナシ	
8	皿	9.0	6.5	1.7	○	ナシ	
9	壊	11.8	8.1	2.3	○	ナシ	
10	壊	13.1	8.0	2.1	○	ナシ	内底に煤
11	壊	13.2	8.7	2.9	○	○	
12	壊	8.0	5.4	3.6	○	ナシ	盃形

III おわりに

本調査地は420m²という狭い面積の調査にもかかわらず、多大な成果を得ることができた。第1面は大正末から昭和初期、第2面は近世、第3面は古代から中世の博多の街の様相を示す成果を得た。以下、簡単に面ごとにまとめていくことにする。

第1面：埋め甕・隅丸長方形の土壌を検出し、人形・人形型が出土したことから、人形師が近世末から昭和初期にかけて居住していたことがわかった。人形づくりの工房および人形・人形型から現代の博多人形を解明する手がかりを得た。

第2面：18世紀前後の比較的まとまった資料を得ることができた。肥前諸窯の出土遺物があり、需要・供給を考えるうえで参考となろう。

第3面：8世紀後半から16世紀にかけての遺構を検出した。古代の遺構は調査区の東側に分布しており、大博通りおよび南東方向に同時期の居住があったことを反映しているといえよう。

SD-335・336・367は第35次調査等検出の道路と並行し、第40次調査検出の第20号溝と直交することから博多の町割りは、東西方向内法27m前後で区画されていたと考えられる。中世都市博多の町割りが整然としていたことが推定できよう。

博多 25

—博多遺跡群第38次調査報告—

1992年（平成4年）3月13日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂一丁目3番7号